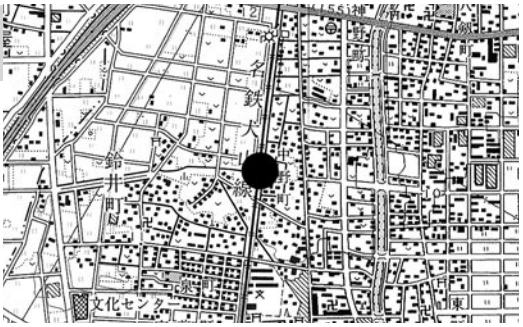
II. 遺跡調査の概要

御山寺（ごさんじ）遺跡

所　在　地　岩倉市中野町
（北緯 35 度 17 分 18 秒 東経 136 度 52 分 13 秒）
調 査 理 由　緊急地方道路整備事業 3・3・8 一宮春日井線
調 査 期 間　平成 18 年 5 月～ 11 月
調 査 面 積　3,000 ㎡
担　当　者　石黒立人・蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「一宮・小牧」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、緊急地方道路整備事業3･3･8一宮春日井線に関わる工事の事前調査として、愛知県建設部都市整備課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成 16 年度から名鉄犬山線の東西両隣接地から調査をはじめ、本年度が 3 年目の調査となる。本年度の調査面積は 3000 ㎡で、調査区は名鉄犬山線の東側で犬山街道を挟んだ地点として 06A 区～ 06Cb 区･06Ea 区･06Eb 区（05Ea 区より南の地点と東の地点）と名鉄犬山線の西側で新溝用水より西の地点として 06D 区（05A 区より西の地点）を設定して行なった。

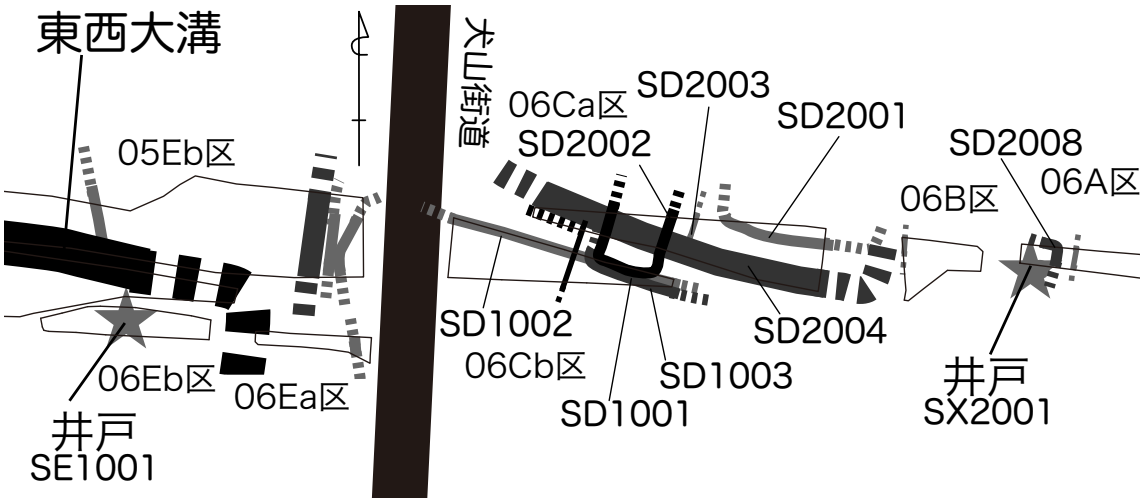
調査の概要　立地と環境　当遺跡は五条川右岸の犬山扇状地末端に位置し、遺跡および付近の標高は 11m 前後である。現在に残る地形には大きな影響はないが、地表部分の微地形は昭和 40 年代の区画整理までに微高地の高所を削り低地へ土砂を移動させた結果であり、特に礫層露出部分ではかなりの遺構が滅失していた。04A 区・05B 区ではその礫層が地表面下約 20cm で露出する箇所があり、05A 区より西に想定される地点ではこの礫層が地表面より低くなることが確認されている。この礫層が低くなる地点は木曽川から分流した旧河道であることが地籍図等からも確認できる。

古墳時代前期　本年度の調査では古墳時代前期の方墳 1 基と中世後半から戦国時代の区画溝多数、旧河道 1 条、畑遺構、江戸時代の水田遺構を検出した。以下、時代別に概観する。

名鉄犬山線の東側にある 06Cb 区で一辺約 11m の方形状にめぐる幅 1.1m ～ 2.2m の溝 SD2001 を検出した。この溝は南西隅部にて溝が途切れており、陸橋部が確認できた。溝からは古墳時代前期（廻間３式）の土器が出土した。またこの方墳の基盤層を形成する北西から南東にのびる自然流路の堆積を確認し、犬山街道を挟んで西に隣接する 05Eb 区東端に確認された弥生時代末の谷地形と対応するものと考えられる。

中世後半～戦国時代　名鉄犬山線の東側にある 06A 区～ 06Cb 区・06Ea 区・06Eb 区では中世後半～戦国時代の溝が東西方向に 5 条、南北方向に 4 条確認できた。

前年度までの調査においても、15 世紀末～ 16 世紀前半の遺物が主体に出土する東西の大溝 SD001



今年度の調査成果（中世～江戸時代初期）　S=1/1,500

に先行する南北方向の小規模な区画溝が 05C 区等において存在することが指摘されているが、本年度の調査では東西方向の溝に前後する南北方向の区画溝を検出できた。本年度の調査において確認できた東西方向の溝は前年度までに確認した SD001 の 10m ～ 20m 北側をほぼ並行する溝で、古瀬戸後期段階～大窯 1 期段階の瀬戸美濃産陶器が出土する 15 世紀末～ 16 世紀前半の溝 2 条 06Ca 区 SD2004・06Cb 区 SD1002 とそれより以前の溝である 06Ca 区 SD2001・06Ca 区 SD2003、それより以後の溝である 06Cb 区 SD1001 がある。06Ca 区 SD2004 は遺構検出面において確認できるだけで幅 3m を超える比較的大きな溝で、遺構配置の状況からは前年度までに確認されている東西の大溝 SD001 の北側を区画する溝として考えられ、何らかの施設が存在した可能性が高い。また 06Ca 区 SD2001 は中世後半の溝で溝の西側にて北に屈曲することが確認できており、06B 区まで及んでいないことから考えると、一辺 50m 以内の範囲を区画していた溝である可能性が高い。同様に 06Cb 区 SD1001 も東西幅 10m で 06Cb 区の北を区画する溝で、東側の溝は 06Ca 区 SD2004 より新しい 06Ca 区 SD2002 に対応するものと考えられる。

南北方向の溝では 06A 区にて確認できた SD2008 は、15 世紀末～ 16 世紀前半の溝で西に屈曲しており、06A 区西端から 06B 区を含む南西側を囲む溝であり、遺構の配置状況から考えると東西幅 30m 以内の区画が推定される。

よって、本年度の調査により中世後半において溝により平面方形状に囲まれた一辺 30m ～ 50m の区画が複数存在することが明らかとなり、15 世紀末～ 16 世紀前半には前年度までに確認された東西大溝の北側に溝に囲まれた一辺 50m を超える比較的大型の方形状区画が別に存在することが明らかとなった。また江戸時代以後にも、小規模な区画が存在することが推定できる。これらの区画溝は本年度の調査区が中世後半以後において各区画の境の部分にあたることを示しており、溝から外れた部分では 06A 区の南西隅部や 06Eb 区中央部においては井戸が確認されている。居住域内部に関わる施設と考えられる。06A 区 SD2008 より東側は中世後半の遺物を含む、溝状遺構の集積や比較的小規模な土坑の集まりが検出できた。遺物の出土が少量であることと溝状遺構の集積が土の撹拌により形成されたものである可能性が考えられることから、06A 区 SD2008 より東側は居住域の外部分が想定され、畑地や園地が広がっていた景観が推定できる。

江戸時代

名鉄犬山線の西側にある 06D 区において東西方向に流れる戦国時代の旧河道跡の上に江戸時代以後と考えられる南北方向にはしる溝と 5 面の水田遺構を検出できた。南北方向に走る溝の多くは調査区東端に集中しており、溝の東西の展開する水田遺構の用・排水路と考えられる。水田遺構は上部の 2 面において幅 12m 前後の条里型水田の平面形態をとっているが、下面の 3 面の水田遺構は一辺 1m ～ 3m 前後の小区画が多数検出される小区画型水田の平面形態であった。これらの水田遺構には犁による耕作溝も少数確認でき、小区画型水田の存在と犁による耕作方法が併存する可能性が高く、農法的解釈において課題が残った。また上から 2 面目において検出できた北北西から南南東の幅 0.3m ～ 1.0m の溝が多数確認され、埋土が上下にて検出された水田遺構に伴う耕作土とは異なる黄色細粒砂が斑土状に多く含まれる状況が観察できた。これらの溝は東に隣接する 05A 区においても確認されており、洪水等による砂の堆積後、耕作を再開する為に耕起した痕跡の可能性が推定された。

（蔭山誠一）



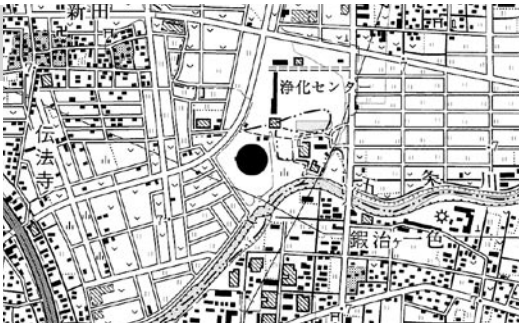
古墳時代前期の方墳（06Cb 区西より）



江戸時代の水田遺構（06D 区東より）

伝法寺野田遺跡（でんぽうじのだ）

所　在　地　一宮市丹陽町伝法寺地内
（北緯 35 度 15 分 46 秒 東経 136 度 50 分 39 秒）
調 査 理 由　五条川右岸流域下水道事業
調 査 期 間　平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　2600 ㎡
担　当　者　石黒立人・蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、五条川右岸流域下水道事業にかかわる工事の事前調査として、愛知県建設部下水道課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。本年度の調査区（06 区）に隣接する地点を、1998 年度に 06 区の西を 98B 区として、1999 年度に 06 区の北を 99 区として発掘調査が実施されており、本調査区の北と西で中世の溝や土坑等、本調査区の西で弥生時代中期中葉の水田遺構と溝、本調査区の北で環濠とも認識できる溝と竪穴住居や土坑等が確認されている。本年度の調査面積は 2600 ㎡で、現地表面から中世から現代の堆積層が混在して堆積する高さまで機械掘削により除去し、中世以前の遺物を包含する堆積から下の古い堆積を発掘調査した。

立地と環境　当遺跡は五条川右岸の氾濫原地帯に位置し、遺跡および付近の標高は 6m 前後であるが、五条川右岸上流流域下水処理場内の本調査地点は 2m 前後の盛り土がされている。

調査の概要　本年度の調査では弥生時代中期中葉以前の小区画型の水田遺構（3 面）、弥生時代中期中葉後半～古墳時代前期の小区画型の水田遺構（2 面）、古代の条里型の水田遺構と中世の溝・方形土坑・水田遺構（3 面）を確認した。

弥生時代中期中葉以前の水田遺構（3 面）は、これまで確認されていない下部にある自然堆積上にある灰色シルト・細粒砂の上面にて検出でき、本遺跡の北東から南西に傾斜する地形に沿った小区画型の水田遺構と溝 3 条、土坑 5 基が確認できた。水田遺構は一辺 1m ～ 3.5m 前後の小区画で、溝は 3 条とも水田遺構の畦畔が形成された後に掘削されたようで、溝の周囲において畦畔が溝に直行する畦畔が形成されている。溝は北側の溝と南側の溝が本調査区内のわずかな微高地部分を流れ、中央の溝が窪地の南端を流れる事が確認でき、推定される水田面と溝の標高等から北側の南側の溝が用水路、中央の溝が排水路の可能性が高い。灰色土の中からは遺物がほとんど出土せず、わずかに土器片が数片確認されたのみである。

弥生時代中期中葉後半～古墳時代前期の水田遺構（2 面）は、本調査区の西で確認されている小区画型の水田遺構の続きで、下部にある灰色シルト・細粒砂の水田遺構の上に白色シルトの堆積からなる自然堆積を挟んだ上にある黒色～黒褐色シルト・細粒砂上面にて検出でき、本遺跡の北東から南西に傾斜する地形に沿った小区画型の水田遺構と溝 1 条、土坑 1 基が確認できた。水田遺構は一辺 1m ～ 3m 前後の小区画で、溝は調査区中央を北から南に検出できた。この溝の周囲においてのみ、畦畔が溝に直行する形で形成されている状況が確認できた。この溝は本調査区の北にて確認されている弧状に廻る溝と位置が対応する事から、その下流部分に対応するものと考えられる。

古代の水田遺構（1 面）は、今回の調査において初めて確認されたもので、下部にある黒色～黒褐色シルト・細粒砂の上に黄白色シルトの堆積からなる自然堆積を挟んだ上に

ある灰褐色シルト・細粒砂上面にて検出できた。水田遺構は東西 10m ～ 13m 前後、南北 6m ～ 13m 前後の区画に畦畔により区切られた条里型水田で、調査区西側を南北にはしる畦畔のみ他の畦畔の幅 0.5m ～ 0.7m より幅広な 1.6m ～ 1.9m 前後で検出でき、水田のより大きな区画を示すものの可能性が高い。

中世の遺構（1 面）は古代の水田遺構を掘り込む形で検出されたもので、方形土坑が 3 基、溝 4 条が確認された。これらの溝は本調査区の西と北の地点において、これまでに確認されているものと対応するものである。　（蔭山誠一）



1 面の水田遺構（南西より）



2 面の水田遺構と溝（北より）



2 面出土の長茎石鏃



3 面の水田遺構（南西より）

朝日（あさひ）遺跡

所　在　地　清須市ほか
（北緯 35 度 13 分 18 秒 東経 136 度 51 分 18 秒）
調 査 理 由　名岐道路・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線
調 査 期 間　平成 19 年 1 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　767 ㎡
担　当　者　赤塚次郎



調査地点（1/2.5万「清州」）

調査の経過　本遺跡は愛知県清須市他に拡がる愛知県下を代表する弥生時代の拠点的な大集落である。遺跡の中央部に存在する谷状地形をはさんで、北と南側に居住区が営まれ、さらにその周囲には広く墓域・生産域が展開する。調査は、名岐道路・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線に伴う事前調査として、国土交通省愛知国道事務所・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は、767 ㎡を対象として、06A 区・06Ba 区・06Bb 区・06Bc 区・06Bd 区・06C 区の 6 調査区を設定し、調査を行った。

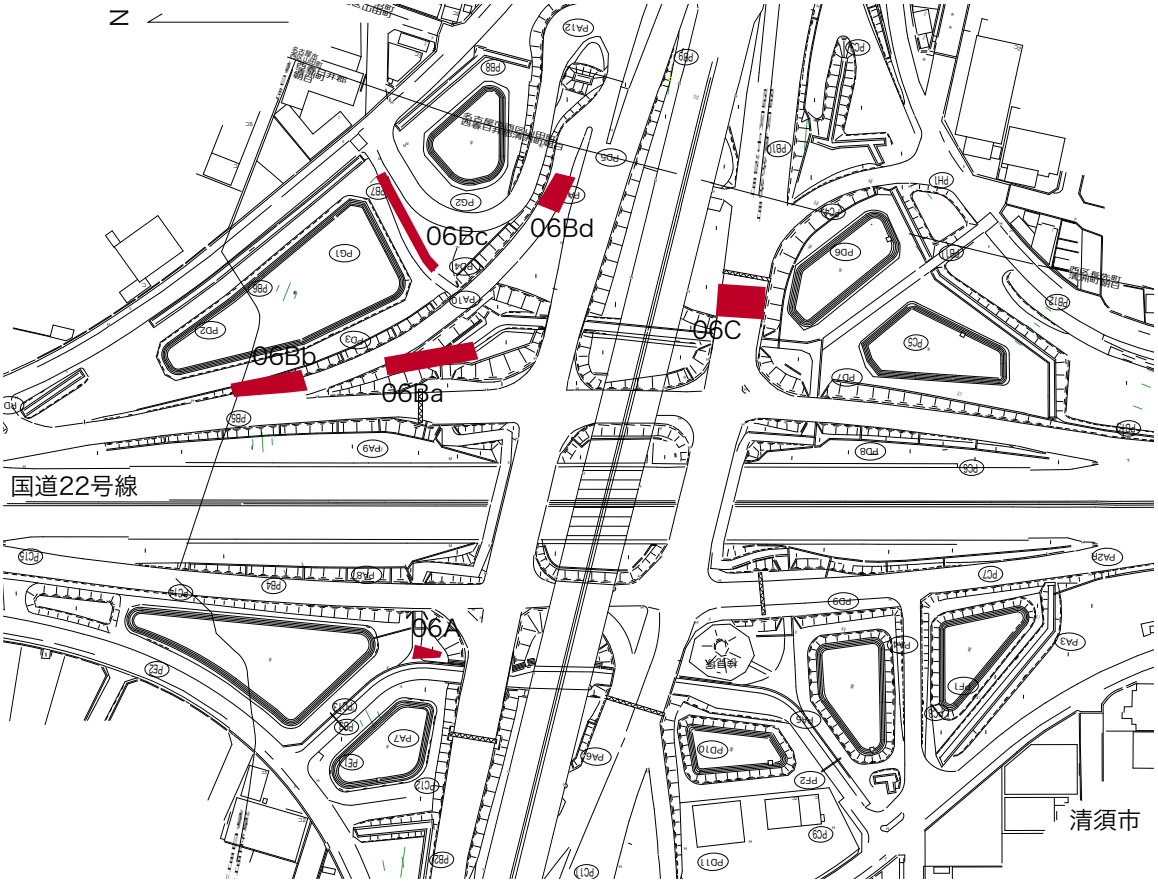
調査の結果　今回の朝日遺跡の調査では、まず 06A 区において , 谷地形を挟んで北側に展開する北集落を巡る外環濠を調査することができた。さらに、その南側に「逆茂木」設置用溝が巡ることをあらためて確認でき、この溝が洪水性の砂層によって覆われている点から、遅くても高蔵式期内において逆茂木用の溝の機能が消失したことが推測できる。

朝日遺跡の集落構成を考える上で、大変重要な要素である谷地形 (谷 A・B)。その幾つかの地点を調査し、具体的な堆積層の情報をえることができた。その中で特に、弥生時代中期末葉段階に洪水性の砂層が比較的厚く堆積し、集落を構成する幾つかの溝を破壊している可能性が指摘できる。洪水性の堆積層に包含した遺物によって、その年代を特定出来る可能性が高く、朝日遺跡の集落景観を考える上でも、大変重要な資料を得ることが出来た。特に 06Bd 区において、谷 A 内に人為的な高まりが存在し、その斜面から中期前半期を中心とした木製品・骨角器などが出土している。洪水性のシルト混じりの砂層は、これら中期前半期の包含層上位に堆積する。

06Bc 区では、高蔵式期に所属する土器棺墓および方形周溝墓が確認でき、墳形プランが溝の中央部に陸橋部を有する前方後方型になることが新たに確認できた。(赤塚次郎)


06A 区地層堆積状況


06A 区環濠



東名阪自動車道路　　S=1:4000



06Bd 区作業風景



06Bd 区遺物出土状況



06Bd 区作業風景



06C 区作業風景

名古屋城三の丸遺跡（なごやじょう　さんのまる）

所　在　地　名古屋市中区丸の内
（北緯 35 度 10 分 50 秒 東経 136 度 54 分 01 秒）
調 査 理 由　名古屋高等裁判所庁舎増設
調 査 期 間　平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　1,089 ㎡
担　当　者　池本正明・加藤博紀・武部真木



調査地点（1/2.5万「名古屋北部」）

調査の経過　調査は名古屋高等裁判所庁舎増設に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　名古屋城三の丸遺跡は名古屋台地の西北端に位置し、台地上でも最も高い地点（標高 12 ～ 13m）に立地する。これまでに 20 ヶ所余りの地点で調査が行われ、弥生時代から近世まで連綿と継続する複合遺跡であることが分かってきている。

調査の概要　今回の調査地点は名古屋城三之丸では南辺の土塁に近く、本町御門のやや西寄りにあたる。隣接して北側には過去に調査された２地点があり、そこでは近世武家屋敷に伴う溝、屋敷裏に掘られた廃棄土坑、戦国期に溯る屋敷地の堀、区画溝等が検出されている。

現地表から約 1.2 ～ 1.4m まで明治以降と思われる盛土であり、特に南半部分ではその深さまで整地された上にコンクリート製建物基礎が入り、調査区全体が大きく破壊されている。盛土には建物跡に伴うレンガ、建築部材と思われる大型の石材、円礫が大量に含まれる。調査区北側を除く範囲では基盤層を約 1.8m 掘込む大型の撹乱５基があり、これらは軍の敷地内に造られた防空壕跡と考えられる。撹乱からは陸軍徽章や「工三」銘のあるカップや皿など陶磁器類、インクや薬などのガラス瓶、歯ブラシ、蹄鉄、ボタン、煙管ほか不明金属製品が大量に出土した。記録によると、付近には陸軍第三師団のうち工兵第三大隊、輜重兵第三大隊等が配され、倉庫群が置かれた場所と想定される。出土遺物の品目や量、良好な遺存状況はそれらを裏付けるものと考えられる。

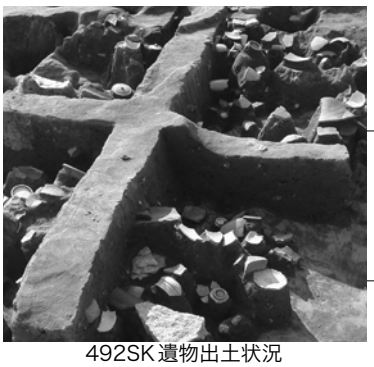
近世は調査区北東部と北西部に包含層が残存し、土坑はこの範囲にほぼ限定される。北東部は南北に長い長方形で断面箱形の土坑、円形土坑、礎石をもつ柱穴などがあり、一方北西部は浅い不定形の土坑、方形と円形の柱穴が激しく重複する。出土遺物は北東部は焙烙や土人形、焼塩壺など土器の割合がやや高く江戸中期のものが含まれる。北西部は江戸後期～幕末の廃棄土坑があり、瓦、土器、陶磁器類の量も多い。近代の削平の影響を考慮しても、調査区中央から南側にかけての範囲では遺構が希薄であり、これは屋敷地の表側として広い空間が確保されていたためと考えられる。

遺物はほとんど含まれていないが、戦国期と思われる遺構として、近世・近代と軸線が異なる数条の溝がある。最も規模が大きいものは、幅約 3m、深さ 2.4m の断面Ｖ字状の南北溝があり、埋土上層に明褐色粘土の整地の際の堆積がみられる。これに重複して大窯前半期のうちに幅 80cm、深さ 60cm、断面逆台形の東西溝が掘られ、戦国期の時期に、周辺が大きく改変されていることが分かった。

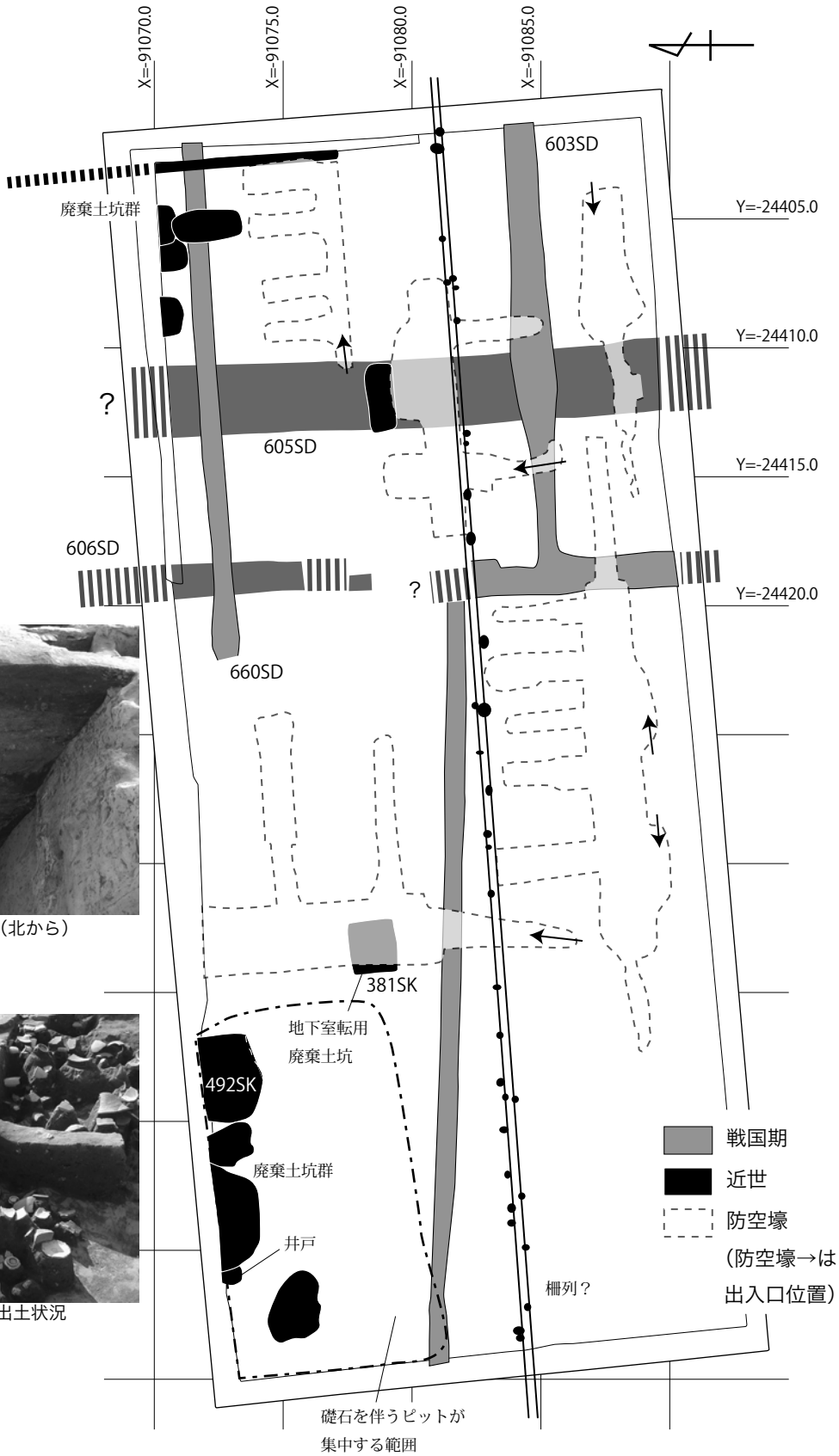
その他、時期の不明確な遺構として同軸方向の東西杭列、ピット列、溝がある。近代の境界と考えられるが、江戸時代の武家屋敷南限が未だ明確ではなく、境界の位置が踏襲されていた可能性と境界施設の構造について分析をすすめたい。　（武部真木）



605SD断面（北から）



492SK遺物出土状況



主要遺構配置図（S=1/250）

かみしな の にしかね じ
上品野西金地遺跡

所　在　地　瀬戸市上品野町
(北緯 35 度 10 分 50 秒 東経 136 度 54 分 01 秒)
調 査 理 由　道路改良工事国道 363 号
調 査 期 間　平成 18 年 10 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　3400 ㎡
担　当　者　小澤一弘・早野浩二



調査地点（1/2.5万「瀬戸・猿投山」）

立地と環境　上品野西金地遺跡は、品野盆地の北東、水野川北岸の丘陵上から水野川に面した低地部分にかけて立地する。丘陵上の標高は約 210m、低地部分の標高は約 200m である。周辺の遺跡として、谷を隔てた西の丘陵上には桑下東窯跡と桑下城跡が、水野川の対岸、標高約 300m の丘陵上には品野城跡が立地する。

調査の概要　今回の西金地遺跡の調査において、縄文時代、古代～中世、戦国～江戸時代の遺構・遺物を確認した。

縄文時代　縄文時代草創期の遺物として、丘陵南東斜面から連続する緩傾斜面の基盤層付近においてチャート製有舌尖頭器 1 点を確認した。付近においては、下呂石製凹基無茎石鏃 1 点も出土している。また、水野川に面した低地部分において、縄文時代に帰属すると推定される土坑数基も確認した。土坑は断面形状が袋状に近いものもある。土坑から出土する遺物はごく少なく、詳細な時期を特定するには及んでいない。

古代～中世　古代～中世の遺構としては、水野川に面した低地部分に展開する掘立柱建物群がある。建物 1、建物 2 は古代後期に帰属すると推定される。建物 1 は一部の柱穴に柱根が遺存する。建物 3、建物 4 は中世前期に帰属すると推定される。建物 3 は桁行 3 間の二面庇付建物で、柱穴から出土した遺物から、13 世紀に帰属すると判断される。建物 4 は桁行 3 間、梁間 2 間の側柱建物で、溝による区画が付随する。

戦国～江戸時代　戦国～江戸時代の遺構は、主として丘陵とその周辺に展開する。丘陵は幾つかの谷状の地形によって分割され、それぞれの丘陵斜面には平坦面が造成されている。

480NR（007NR）とした谷状の地形には、谷の一定の埋没後に石積みが施され、石積みの周囲には大窯期前半を主とする遺物が大量に残されていた。石積みの周囲、谷を埋積する堆積層、谷の整地層中から出土した遺物には、天目茶碗などの碗類、丸皿などの皿類、擂鉢、釜などの通有の器種に加えて、茶壷、茶入、舟徳利、水差、燭台、仏餉具、魚形水滴、鳥 (鶏・水鳥) 形水滴、狛犬などのやや特殊な器種も多く含まれる。なお、茶壷の内部には骨片が遺存し、焼成後底部穿孔を施した個体も数個体確認した。匣鉢、挟み皿などの窯道具、焼成不良品の出土も多い。

丘陵東斜面から南東斜面においても、大窯期前半の遺物を大量に包含する堆積層が確認された。大窯の操業時に形成された灰層が部分的に残存している可能性も考えられたが、周辺に窯跡が存在した形跡は確認されていない。

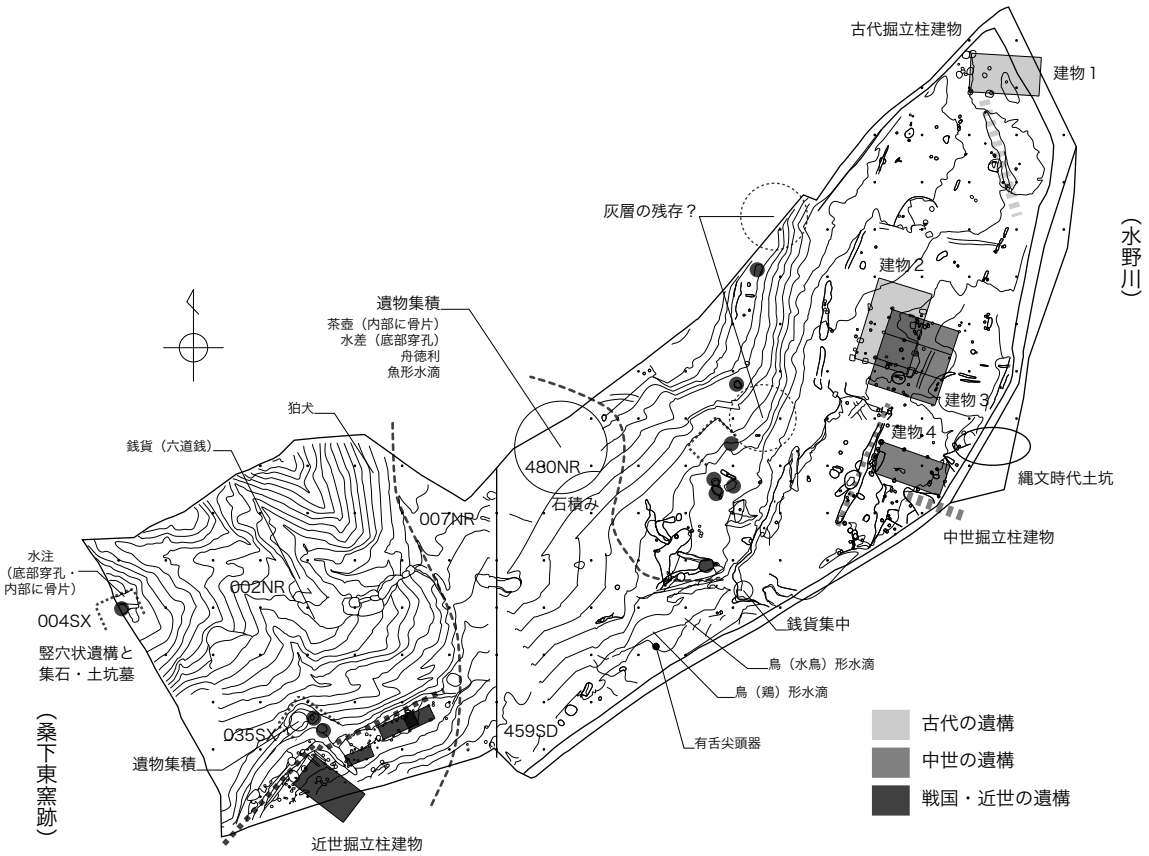
丘陵斜面と丘陵斜面を掘削して造成した平坦面には、集石遺構が点在し、002NR 南岸、丘陵南斜面の平坦面には数棟の掘立柱建物が分布する。集石遺構は、遺跡に西接する桑下東窯跡から連続して分布する遺構で、桑下東窯跡と同じく丘陵斜面を竪穴状に掘削した平坦面に集石を配するものが多い。背後に排水溝が付随するものもある。集石の

下位には土坑が検出されることから、集石と土坑は一体として墓を構成するものであったと考えられる。土坑内から遺物はほとんど出土していないが、002NR 南岸に配された竪穴状の遺構 004SX 付近には、焼成後底部穿孔を施した大窯期前半の水注が正位で据え置かれ、水注の内部には骨片が遺存していた。480NR 東岸に配された集積遺構群の近辺においては、大窯期前半の燭台などに混じって、80 枚以上の銭貨、煙管などの青銅製品、漆器椀が散在した状態で出土した。銭貨は全て渡来銭で、開元通宝、永楽通宝などの多様な銭種で構成される。丘陵南斜面を造成した平坦面において検出された掘立柱建物は、江戸時代に存続したものと推定される。周辺における同時期の遺物の出土も相対的に少なく、小規模な居住地を構成するものであったと考えられる。

まとめ

今回の調査で、上品野西金地遺跡は、縄文時代、古代～中世、戦国～江戸時代の複合遺跡であることが明らかになった。縄文時代の遺物は、品野盆地における同時期の遺跡の広範な展開を予測させるものである。古代～中世の遺構群は、低地に立地する集落を構成するもので、掘立柱建物が比較的大型である点も興味深い。戦国～近世の遺構・遺物は、質量とも遺跡の主体を構成するものである。特に大窯期前半については、出土遺物の内容から、遺跡付近に窯跡が存在したことに加えて、陶器の生産と流通に従事した集団が周辺に居住し、墓域を形成していた可能性も想起される。とするなら、関係する窯跡、集団の具体的な活動内容を明らかにすることが、今後の重要な検討課題となる。

（早野浩二）



遺構配置図（S=1:800）



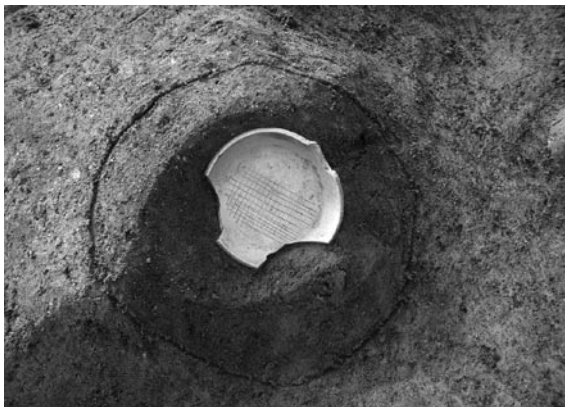
有舌尖頭器



建物 1



古代 ~ 中世掘立柱建物



建物 3 遺物



谷 480NR 東岸



谷 480NR 遺物 1（茶壺）



谷 480NR 遺物 2（水差）



谷 480NR 遺物 3（舟徳利）



谷 NR007 遺物 1（狛犬）



谷 007NR 遺物 2(窯道具など)



丘陵東斜面の灰層？



灰層？遺物



004SX 遺物 (水差、内部に骨片が残る)



集石遺構



谷 NR002



近世掘立柱建物

にしまつやまとうげ 西松山峠窯跡

所　在　地　所在地　瀬戸市北松山町
（北緯35度14分13秒　東経137度04分47秒）
調 査 理 由　特殊改良一種工事国道155号
調 査 期 間　平成18年6月～8月
調 査 面 積　750㎡
担　当　者　小澤一弘・宇佐見守・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

調査の経過　発掘調査は、国道155号特殊改良一種工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。山林伐採と地形測量ののち発掘調査を実施した。

立地と環境　瀬戸市今地区と水野地区を結ぶ国道155号が南北にのびる。その丘陵地を抜ける最高地点は切り通しの峠となる。遺跡は峠の西側山林（標高122～128m）に位置し、道路との高低差は約3mある。付近には山茶椀焼成窯が点在する。

調査の概要　調査前、遺跡とその周辺は段々畑状の耕作地となっていた。既に窯体が滅失していたため、灰層の基点やその展開方向について全く予想がつかない状態であった。しかも耕作によって拡散したとみられる山茶椀や古瀬戸製品が広範囲の地表面で採取されたため、遺跡の中心が容易に把握できない状況にあった。そこで遺物散布範囲に対し調査区が設定された。

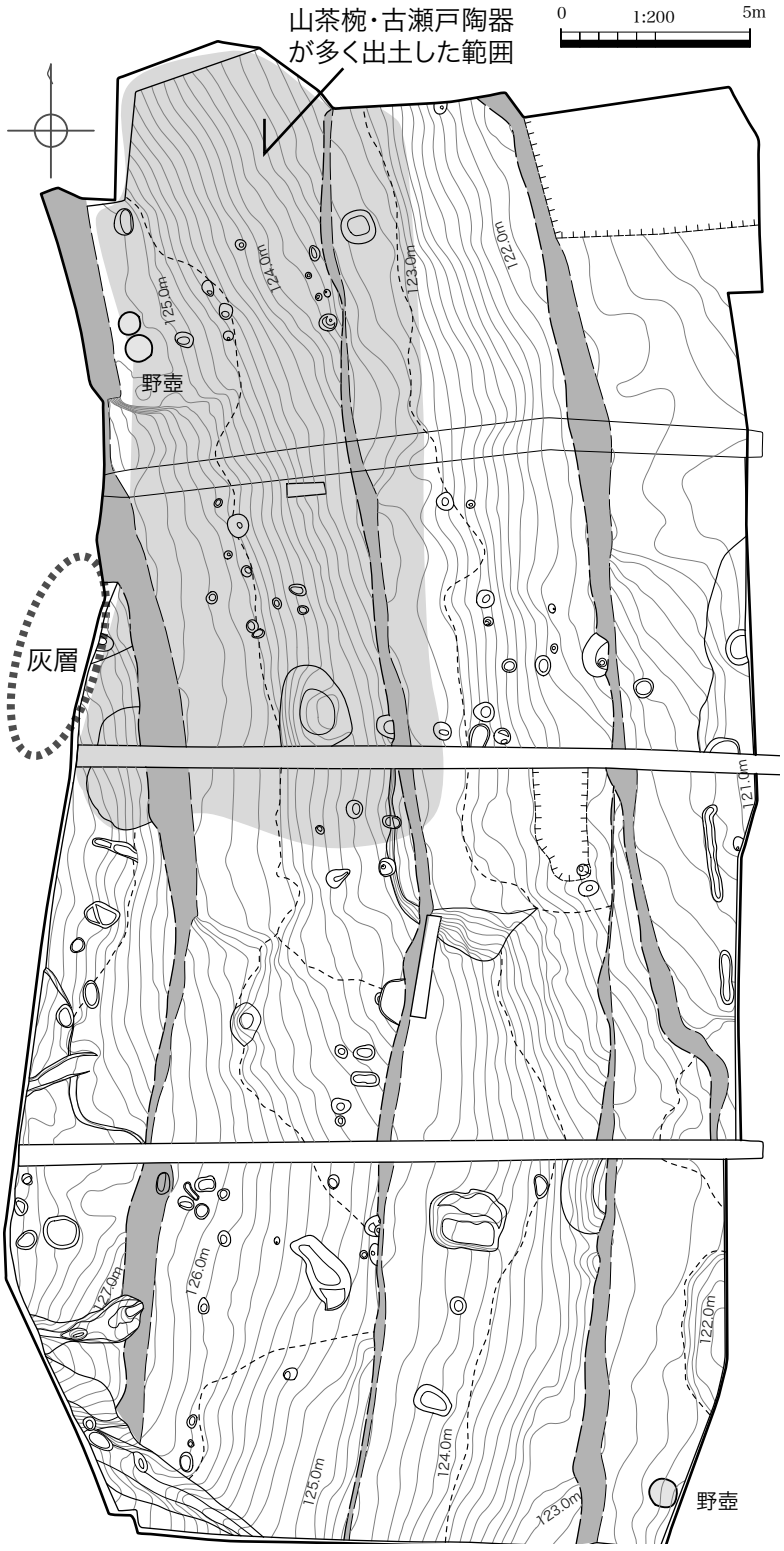
調査の結果、灰層が残存していたのは調査区内最高所となる西端の一角のみで、それ以外での遺物の出土は耕作や土砂流出による拡散であることが明らかとなった。残存灰層は調査区内で約1×2mの範囲で、そこから西へ若干広がるものと思われる。基盤となる黄褐色砂質土層の上に炭化物の多い黒色土層があり、これは灰かき出しに伴うものであろう。さらにその上には複数の堆積層が認められるが、窯体が不明であるためこれら堆積層の成因については特定が難しい。なお、想定される灰層の範囲は、およそ南西方向から北東方向への下り傾斜に展開するであろう。

調査区南半部では、少なくとも鎌倉時代以降に発生した土砂流出の痕跡が確認できた。これは当初基盤層と思われた黄褐色土層内からも山茶椀片が出土したことによる。調査区より高所から下ってきた土砂がくぼ地に滞留し逆にそこが盛り上がった状態となっていた。ただここから窯体片は出土しなかった。このように比較的新しい時代に発生した土砂流出によって遺跡が滅失したり埋没したりする可能性は、瀬戸市域のほぼ全域で想定すべき現象であり、遺跡の有無および範囲確認に際しては注意を要する。


調査区西端遺物出土状況

出土遺物は、山茶椀と小皿が主体で、調査区北半部では古瀬戸四耳壺が出土した。山茶椀は重ね焼き状態のものや、焼台が付着したものもある。高台のないものも含まれるなど、

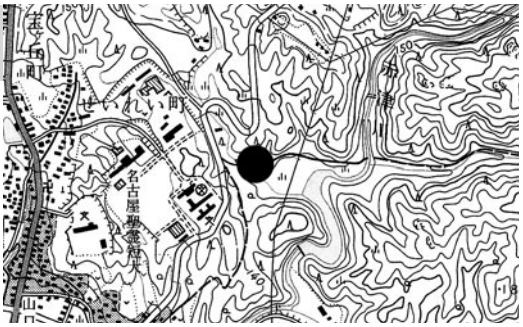
時期幅を想定しておきたい。焼台には青灰色が主体で明赤褐色のものが若干ある。遺物はコンテナ約 50 箱分あるが、これらを整理していくことで未知の窯について示唆が得られるものと考えている。（永井邦仁）



遺構配置図　S=1/200

塚原（つかはら）1号窯跡

所　在　地　瀬戸市若宮町一丁目
（北緯 35 度 12 分 14 秒、東経 137 度 6 分 45 秒）
調 査 理 由　道路改良工事国道 248 号
調 査 期 間　平成 18 年 9 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　970 ㎡
担　当　者　小澤一弘・宇佐見　守・川添和暁



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

調査の経過　本調査は、国道 248 号道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて、愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。平成 18 年 9 月から平成 19 年 3 月までの予定で実施しており、調査面積は 970 ㎡ある。

立地と環境　窯跡は矢田川（赤津川）が大きく南向から西向に屈曲する、右岸側の丘陵上に位置している。標高は丘陵上部で約 140m。付近には、塚原 1 号墳などの古墳群の存在が知られており、本窯跡群と同一丘陵上には、若宮 1 号墳が存在する。また、矢田川を挟んだ南側の丘陵にも、広久手 1 号墳などの古墳や、百代寺窯跡・広久手 1 号窯跡など、古墳・窯業遺跡が集中している地域といえる。

調査の概要　本窯跡群からは、窯体が 2 基（塚原 1 号・3 号窯跡）検出され、それぞれに対応する前庭部や整地された平坦面・灰原が調査された。1 号窯・3 号窯ともに、無釉陶器の山茶碗と施釉陶器の古瀬戸の両者を生産していた。山茶碗は第 7 型式、古瀬戸は前期第二段階に属し、1 号窯・3 号窯の遺物からの時期差は見られない。但し、塚原 3 号窯跡の検出状況および灰層など包含層の堆積状況から、最終焼成は、1 号窯の方で行われていたと想定される。

塚原 1 号窯跡　窯体 (001SY) は、全長 8.9m・最大幅 2.2m・最大高 1.5m・床面傾斜は燃焼室で 22 度・焼成室で 32 度を測る。窯体は、丘陵中腹の標高 131 ～ 136m に立地している。焚口から煙道部まで残存していた。特に注目されるのは、天井部の残存とダンパー部分の残存である。天井部のアーチは中央部で凸状に盛り上がっており、分焔柱付近が特に顕著であった。床面には焼台の一部が残存していた。床面を精査したところ、焼台痕の配列を床で確認することができたのは、大きな成果である。窯体内部は、赤色を呈している。また、ダンパー部分では、径 3 cm ほどの木の棒を軸にして粘土を筒状に付けたものが、2 つ見つかっている。1 号窯跡に直接関連する遺構として、窯体西側を巡るカット部分 (002SX)、窯体掘削土や、修復時に排出された土などによる盛土 (003SX・007SX・008SX)、前庭部からの整地面 (006SX)、灰層 (009SX) がある。009SX の堆積は、より山側からの土砂堆積により変化したようであり、それを基準として上層・下層 1 ～ 4 と、下層 5 に大きく二分できる。厚いところで、2 m30cm ほどの堆積が確認された。また、窯体北部には、粘土の堆積層が存在しており、その付近で窪地化している部分が存在する (004SX)。この粘土の利用についても検討が必要である。

塚原 3 号窯跡　窯体 (010SY) は、全長 9.2m・最大幅 3.0m・最大高 1.5m・床面傾斜は燃焼室で 30 度・焼成室で 20 度を測る。窯体は、丘陵下段の標高 123 ～ 129m に立地している。焚口から煙道部まで残存していた。窯体内部は、赤色を呈している。最終焼成後に燃焼室・焼

成室の床の硬化面を全面にわたってはがしたようである。燃焼室および焼成室下半では、そのはがされた床上に未焼成の粘土塊がまとまって出土した。最終焼成後の二次的利用の可能性も考えられる。３号窯跡に関連する遺構としては、窯体掘削土や、修復時に排出された土などによる盛土 (011SX)、灰原 (012SX) がある。011SX 上には、粘土たまりが数カ所で検出されており、一部は被熱で赤色化している。011SX は 009SX(１号窯跡灰原) の堆積をあまり受けておらず、１号窯操業時にも開けていた可能性がある。

遺物の出土状況

山茶碗 (片) の出土が多い場所と、古瀬戸 (片) の出土が多い場所は、異なるようである。006SX の北端を中心に、山茶碗の細片がまとまって出土した。009SX では形状がより残存した陶器片が出土するのとは対照的である。また、使用された陶器片 (調整具か) がまとまって出土している。現在、確認できているのは山茶碗片を利用したもののみである。多くは 006SX の掘削時に見つかっている。

出土遺物の器種は、山茶碗系では碗・小皿、古瀬戸系では四耳壷・瓶子・水注・花瓶・卸皿・水滴などがあり、その他、鉢・入子・陶丸がある。古瀬戸系のなかで、はじめてとなる戯画が線刻された四耳壷片が、１号窯跡焚口付近から出土した。

陶器片とともに、多量の焼台 (片) が出土している。発色により、灰色のものと赤色のものに分けられる。灰色のものは内面形状が凹状を呈するものが多く、赤色のものは内面形状が凸状・凹状・浅い凹状など多様であり、砂利が付着しているものも散見される。前者が山茶碗、後者が古瀬戸に対応するとするならば、上述した陶器片の出土状況に、焼台の出土状況もおおよそ一致する。ただし、006SX の北端や 013SX など、陶器片に対して焼台の出土量が圧倒的に多い場所も存在する。

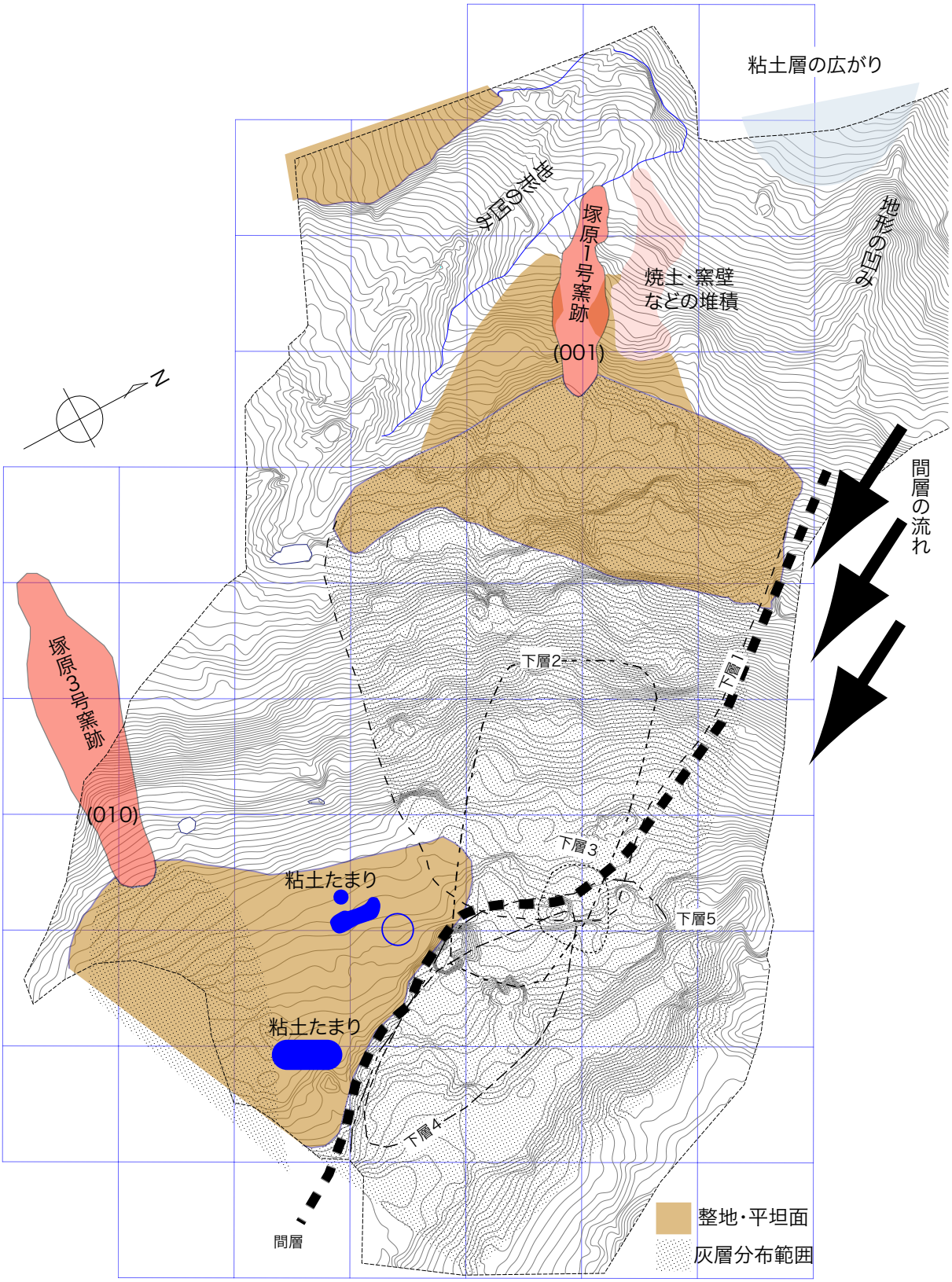
まとめ

遺跡全体はこれまで繰り返し盗掘を受けていたものの、保存状態は良好で、窯体のみならず、周辺に展開する一連の作業 (場) を総合して検討し得る調査事例となることが、最も大きな成果である。１号窯・３号窯の保存が良好であったことから、当該時期の窯業生産跡の指標となりうる調査例となったといえる。１号窯と３号窯との操業関係もさることながら、当該時期における山茶碗・古瀬戸の同時焼成の問題など、今後、検討する課題が多いと考えられる。

(川添和暁)



塚原１号窯　窯体断ち割り状況


粘土層の広がり
地形の凹み
塚原1号窯跡
(001)
焼土・窯壁
などの堆積
間層の流れ
N
塚原3号窯跡
(010)
下層2
下層1
下層3
下層5
下層4
粘土たまり
粘土たまり
間層
整地・平坦面
灰層分布範囲



塚原窯跡群全景 (南より)



塚原 1 号窯跡 (001SY) 全景 (東より)



塚原 1 号窯跡 (001SY) 焼台痕配列 (東より)



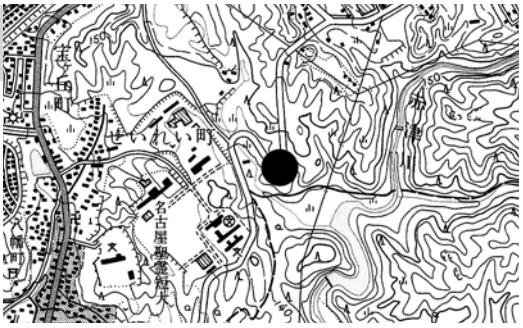
3 号窯跡（010SY）全景（西より）



戯画が線刻された四耳壺片

わかみや　ごうふん
若宮 1 号墳

所　在　地　瀬戸市若宮町一丁目
(北緯 35 度 12 分 14 秒、東経 137 度 6 分 45 秒)
調 査 理 由　道路改良工事国道 248 号
調 査 期 間　平成 18 年 9 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　270 ㎡
担　当　者　小澤一弘・早野浩二



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

立地と環境　若宮 1 号墳は、矢田川右岸の丘陵上に立地する。周囲の丘陵には高塚山古墳群、塚原古墳群、山口堰堤古墳群が分布する。若宮 1 号墳は丘陵頂部よりからやや下降した傾斜地に築造される。付近の標高は、約 140m である。現状において、同一の尾根筋に古墳の分布は認められない。

墳丘　墳丘の遺存状況は良好でなく、盛土もその多くがすでに流出していた。周溝も検出されなかったが、墳丘の南東から東斜面の裾にかけて外護列石が部分的に残存していたことから、古墳は径約 9.5m の円墳であることが明らかとなった。現状における墳丘の高さは約 1.5m で、墳丘西側と北側は丘陵斜面に連続する。墳丘周辺からは、6 世紀末 ?7 世紀初頭の須恵器高杯が出土した。

横穴式石室　古墳の埋葬施設は横穴式石室で、調査前からすでに奥壁と側壁が露出し、周囲には大型の石材も散在していた。横穴式石室は S-12° E の方向に開口する全長 5.4m の擬似両袖型石室である。天井石はいずれも原状を留めていなかったが､玄門と羨門の立柱石が原状、あるいはそれに近い位置で検出された。横穴式石室に使用された石材は全て、付近に産出する花崗岩である。

玄室は長さ約 3.2m、幅約 1.2m で、平面形はほぼ長方形である。玄室床面には礫床としていた礫が散在する。玄門付近は礫を積み上げて閉塞されていた。羨道は長さ約 2.0m、幅約 1.2m で、平面形はほぼ長方形である。羨門の立柱石は外護列石に接続する。玄室内において古墳に関連する遺物は出土しなかったが、羨道からは、7 世紀前半の須恵器平瓶、鏃が破砕されたような状態で出土した。また、玄室床面付近には中世陶器や炭化材が残され、羨道床面付近は被熱していた。これらは、中世の段階に横穴式石室が再利用されたことを示すものである。

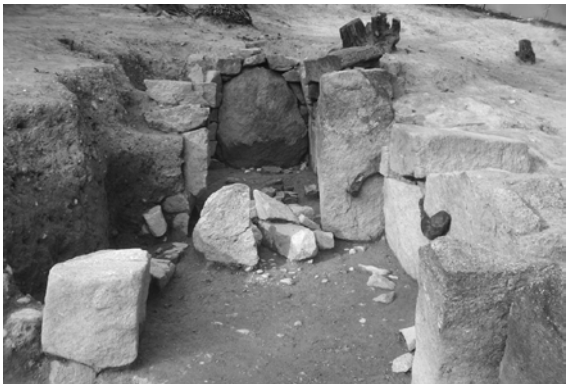
まとめ　調査の結果、若宮 1 号墳は、径約 9.5m の円墳であることが明らかとなった。古墳が築造された時期は、墳丘の周辺から出土した須恵器から、6 世紀末～ 7 世紀初頭と考えられ、羨道から出土した須恵器は、7 世紀前半まで追葬が行われた可能性を示唆する。古墳の埋葬施設は、周辺の古墳群に多く認められる擬似両袖型の横穴式石室で、羨門までを含めた全体的な平面形状を明らかにできた成果は特筆される。これらの調査成果は、古墳の立地と分布、築造時期と利用期間、墳丘の外部施設と横穴式石室の構造等を比較検討する好材料となるものである。　（早野浩二）



若宮１号墳平面図（S=1:200）



全景



横穴式石室



玄室



羨道



閉塞状況



玄室床面

山口堰堤３号墳（やまぐちえんてい　ごうふん）　範囲確認調査



所　在　地　瀬戸市若宮町１丁目
（北緯 35 度 12 分 9 秒、東経 137 度 6 分 40 秒）
調 査 理 由　道路改良工事国道 248 号
調 査 期 間　平成 18 年 8 月
調 査 面 積　50 ㎡
担　当　者　小澤一弘・早野浩二

調査の経過　山口堰堤３号墳の範囲確認調査は、古墳の保存の可否、あるいはその措置を検討する目的で実施した。

立地と環境　山口堰堤古墳群は、３基から構成される古墳群で、矢田川右岸の丘陵斜面に立地する。周囲の丘陵上には高塚山古墳群、塚原古墳群、若宮１号墳が分布する。山口堰堤３号墳周辺の標高は、約 118m である。

調査の概要　古墳が立地する尾根の裾付近は、段状に地形が改変されている部分が多く、墳丘についても南側や北西側はすでに改変されていると思われる。一方、墳丘北東側と西側の斜面と裾が比較的旧状に近いとすると、古墳は径 14 ～ 15m の円墳として復原される。古墳の埋葬施設は、南方向に開口する擬似両袖型の横穴式石室で、石室の両側壁はすでに露出し、周囲には大型の石材が散在していた。

範囲確認調査においては、墳丘斜面に５地点の試掘坑 (T.T.01 ～ 05) を設定し、墳丘の遺存状況と築成状況、外部施設の有無等を観察した。調査の結果、墳丘盛土や周溝、葺石などの外部施設は確認されず、調査の結果から古墳の規模を確定することはできなかった。古墳に関連する遺物としては、T.T.-05 の墳丘側斜面下の緩傾斜面において出土した６世紀後半の須恵器蓋１点がある。

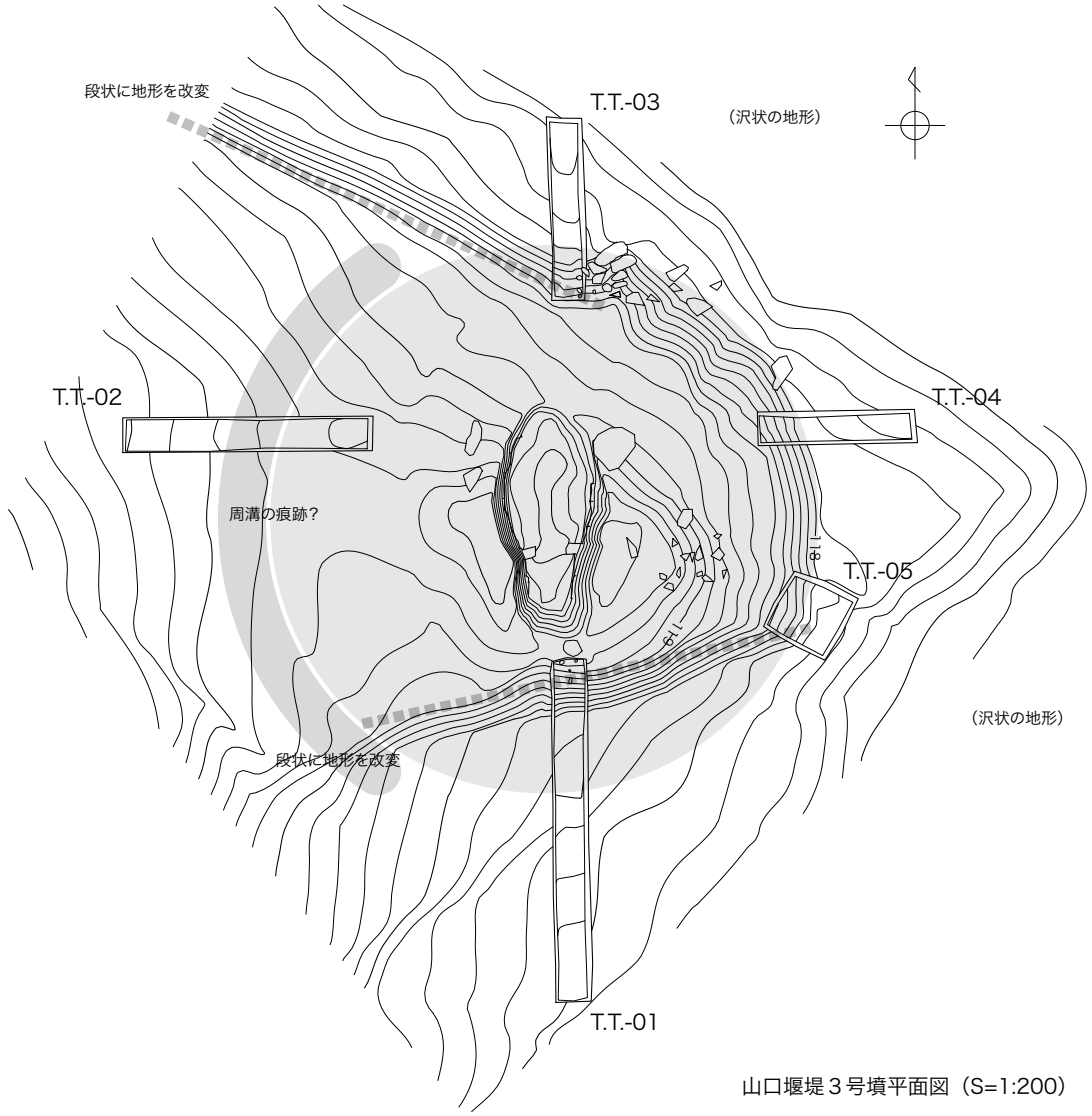
まとめ　今回の範囲確認調査の結果、発掘調査に際しては、遺物の散布状況、古墳と自然地形との関係、古墳に関連する施設などが存在する可能性を考慮して、墳丘周囲の一定の範囲を調査対象とする必要があることが明らかとなった。（早野浩二）



T.T-2 作業風景



T.T-2 全景



山口堰堤３号墳平面図（S=1:200）



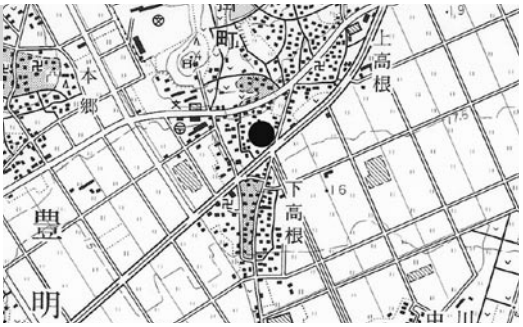
現況



全景

薬師ケ根（やくしがね）遺跡

所　在　地　豊明市沓掛町
（北緯 35 度 04 分 00 秒　東経 137 度 01 分 46 秒）
調 査 理 由　道路改築工事（一）春木沓掛線
調 査 期 間　平成 18 年 8 月～ 10 月
調 査 面 積　750 ㎡
担　当　者　池本正明・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「知立」）

調査の経過　発掘調査は、県道春木沓掛線改築工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。道路が県道 57 号線と交差する地点および側道部分が調査対象地となった。当該遺跡は、平成 9 年に豊明市教育委員会によって試掘調査が行なわれており、調査対象地点には須恵器～灰釉陶器の窯もしくは灰原が想定されていた（森前 1 号窯跡）。しかしながら調査の結果、須恵器窯跡は存在せず、古代から中世の集落が展開していたことが明らかになった。

立地と環境　遺跡は名古屋市南東部の丘陵が境川に向かって下る斜面地端部に立地し、現況では県道 57 号線から西側が住宅地と畑、東側が水田となっている。付近一帯の丘陵には大小の谷が入り込むため、その端部は細い尾根となってのびる。それらには「根」を含む地名が付され、薬師ヶ根もそのひとつである。なお、遺跡は字薬師ヶ根から北畑、森前までに広がるとみられ、標高約 16 ～ 19m の範囲となる。標高約 15m 以下は埋没谷となり、長らく湿地となっていたらしく、今回の調査区においては居住地としての土地利用はなかったことが確認された。

調査の概要　調査開始時、須恵器窯跡が想定されていた地点（先述）には、小山状の高まりがあり旧地形および窯跡の一部が残存しているものと思われた。しかし調査の初期段階にて、この高まりはごく最近の土盛りであって、その下に緩い傾斜面の存在することが判明した。この傾斜面に広がる遺物包含層は近代までの畑耕作土で、この下にひろがる白色小礫混じりの橙色シルト層（以下、地山）にて遺構検出を行なった。

遺構検出の結果、平安時代と鎌倉時代～室町時代前半の集落、江戸時代の井戸（029SE）が確認された。これらの遺構以外では、大量に廃棄された須恵器の二次堆積（186SX）が特記される。

須恵器の大量廃棄　186SX は標高 17m 前後の地山などを直線的に切り込む削平の痕跡で、そこに堆積した土にコンテナ約 10 箱分の須恵器と若干の灰釉陶器・山茶椀が含まれていた。この削平そのものは比較的新しく、中世の溝（187SD、後述）の堆積層を切り込んでおり、井戸（029SE）に先行することが遺構の重複関係から判明した。耕作による削平と推定されるが、遺物破片が 5cm 四方以上あるものが多い点は通常の耕作土からの出土状況とは異なる。

須恵器は蓋・杯（有台・無台）、椀、有台盤、高盤、長頸瓶、短頸壺、こね鉢、大甕などがある。時期は折戸 10 号窯式期にほぼ限定されそうである。この中には蓋と長頸瓶の頸部が融着したものが 1 点、焼台に使用された可能性のある大甕破片 1 点がある以外は、窯跡出土遺物に多い融着・変形品はほとんどみられなかった。ただ、杯や盤のなかには釉の飛沫が付着したものがあるなど、何らかの基準から外れた「不良品」が含まれる。この須恵器群については、窯出しされた製品を運んできて二次選別した後に廃棄された

ものと考えられる。最近の調査事例では日進市金萩遺跡が挙げられる。

しかし、選別のための施設など当該期の明確な遺構は確認できなかった。須恵器は186SX以外にも中世の溝（187SD）などからも多く出土し、その位置からすると施設はより高所にあったことをうかがわせる。

平安時代の竪穴建物

186SXが切り込む遺構群のひとつに平安時代と推定される竪穴建物跡群がある。一辺が3m規模の小さなものが、狭い範囲で重複する。覆土が地山土に近い暗褐色シルトが大部分であり、遺構として疑わしい部分もあったが、折戸10号窯式期の須恵器やそこからやや時期の下る灰釉陶器がわずかながら出土したことから比較的短期間の使用と埋め戻しのサイクルで建物があったと判ぜられた。火処はなく、土器以外に顕著な遺物がない。

山茶椀窯跡の存在

調査区北西部の撹乱で山茶椀が重ね焼きの状態で出土した。時期は13世紀代とみられ、今回の調査区内では溝が掘られ掘立柱建物が造られる時期でもあり、背後の丘陵地にもその存在を想定するのは難しい。ただ、遺跡の南東には山茶椀窯と推定される下高根1～3号窯跡が所在する（既に滅失か）。ここから移動してきたと考えられる。

中世の溝と建物

299SD・279SD（上層が141SD）・187SDの溝は、出土する遺物から13～15世紀と考えられる。299SDは屈曲部に袋状の深い箇所があり、側壁を大きく抉り込む。底部近くでは粗砂とシルトの交互堆積となっており、溜井の機能があったと考えられる。またその周囲には小ピットが集中しており、覆屋根があったのかもしれない。次に279SDであるが、ここからは古瀬戸前期様式後半～中期様式期の四耳壺や常滑産甕などの破片が多数出土した。また青磁片数点も出土している。遺物の時期は13世紀後半から14世紀代とみられる。187SDでは186SX同様須恵器が多く出土したが、年代下限は中世である。これらの溝は一定の距離をおいており、また279SDと187SDの間には1間×2～3間程度の掘立柱建物が想定されることから、屋敷地となっていた可能性が考えられる。

187SDの脇では竪穴建物跡が確認された（184SB・185SB）。底面で柱穴は検出されず、底面近くの覆土中から古銭（北宋銭）や土師質羽付鍋が出土した。また、底面では炭化物が目立ち、鉄滓も若干出土した。いずれも建物廃絶後の廃棄によるものと考えられるが、付近に鉄鍛冶施設があったことを示すものであり、注目される。

戦国時代以降溝と井戸

134SDは一見中世前半の溝群に類似するが、覆土が全く異なり戦国時代以降の遺物がみられることから、比較的新しいものと考えられる。また029SEは187SD埋没後に掘られた井戸である。素掘りで深さは約3m、井戸枠などの構造物はなかった。時期を示す出土遺物はなく、遺構の重複関係などから江戸時代以降のものと推定した。

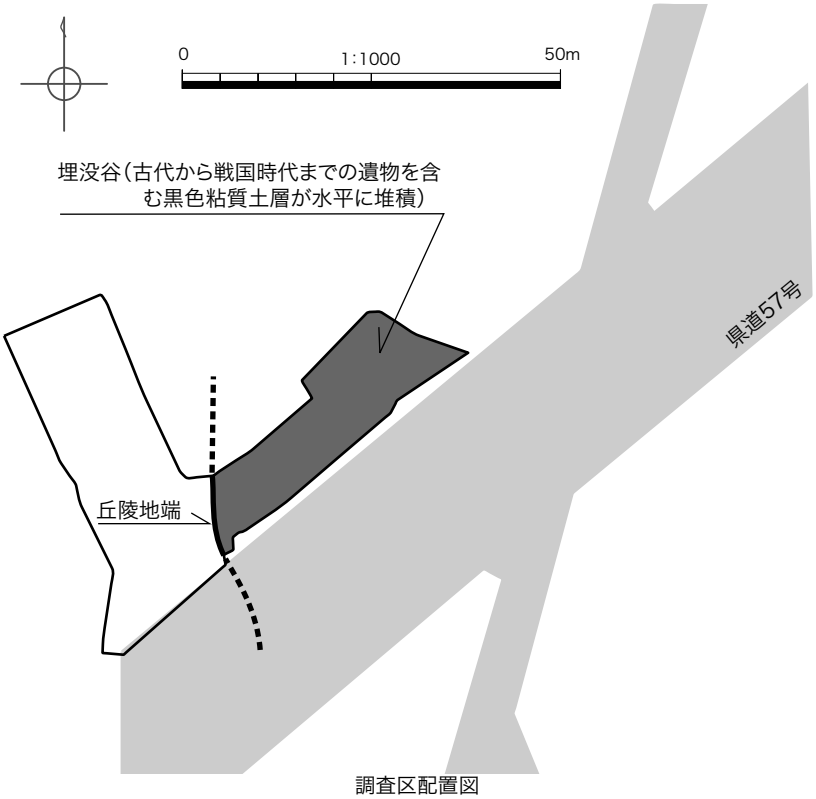
遺跡の特徴

薬師ヶ根遺跡周辺の丘陵地は、猿投窯の一支群として8世紀中葉（鳴海32号窯式期）以降に須恵器窯が、そして9世紀以降に灰釉陶器窯が増加する。そこから他地域への製品搬出ルートは現・境川に相当する河川が考えられる。薬師ヶ根遺跡から北西には山新田窯跡や勅使池窯跡などが確認されており、ここから若王子川などの小河川を通じて境川のある低地へと製品を移動させたとすると、当該遺跡の付近を通過したことになる。このような遺跡立地は当該遺跡の須恵器出土状況を理解するうえで重要である。

中世の遺構・遺物については、遺跡西方約0.6kmに位置する沓掛城跡で確認された遺構・遺物の時期よりさかのぼる点が注目される。そして逆に沓掛城は16世紀代に機能した城郭であるが、薬師ヶ根遺跡では当該期のまとまった遺構・遺物を見いだすことができない点も重視されよう。前者については、文献史料の少ない境川流域の中世前半の動向の

一端をつかむ好資料になるものと思われる。また後者については、戦国時代における集落の移転を想定する向きもあろう。

ところで当該遺跡北方約 0.4km には、奈良時代の平城宮跡出土瓦と類似文様の軒丸瓦などが出土した上高根行者堂遺跡がある。ここに奈良時代東海道の両村駅を想定する見解もあり、南北方向に伸びる古道もある。古道は当該遺跡の脇を通り下高根の集落へと南下するが、今回の調査範囲の中では古代東海道と呼びうる道路遺構は確認されなかった。（永井邦仁）



調査区配置図



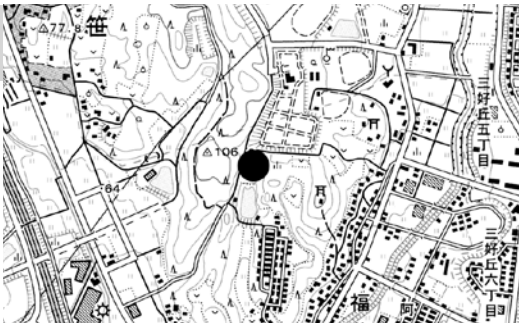
調査区（丘陵上の遺構）全景（北東から）



調査区（丘陵上の遺構）全体図と土層断面図

K - G -93 号窯跡

所　在　地　西加茂郡三好町大字福谷
（北緯 35 度 07 分 12 秒　東経 137 度 06 分 05 秒）
調 査 理 由　緊急地方道路整備事業（主）豊田知立線
調 査 期 間　平成 18 年 9 月～ 12 月
調 査 面 積　750 ㎡
担　当　者　小澤一弘・宇佐見守



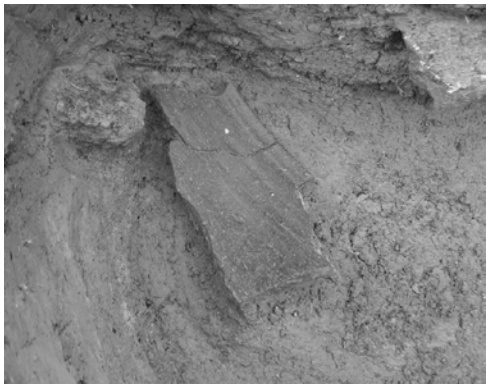
調査地点（1/2.5万「平針」）

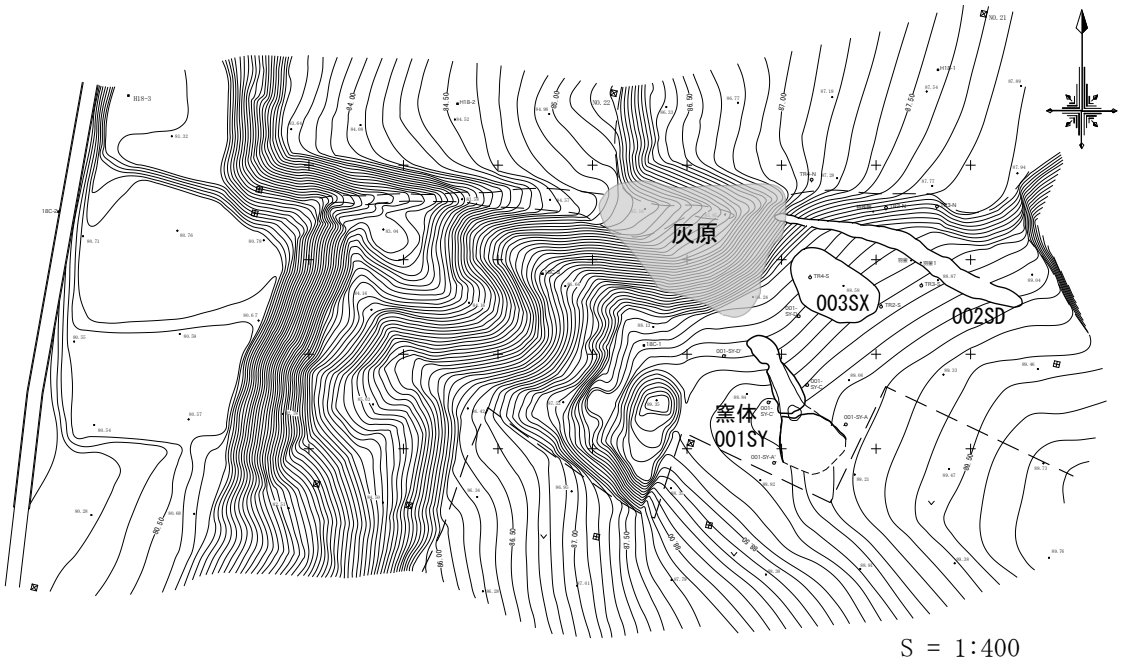
調査の経過　本遺跡の発掘調査は、県道豊田知立線の建設にともなう事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 18 年 9 月から 12 月にかけて実施した。調査面積は 750 ㎡である。

立地と環境　本遺跡は西加茂郡三好町の北部に位置し、境川とその支流である小石川に挟まれた標高 88 mの丘陵上に立地している。遺跡の北には昭和 63 年に発掘調査され、現在、町指定史跡として保存されているK -27 号窯跡がある。

調査の概要　調査区南東部の平坦面で、窯体（SY01）と粘土溜り（SX03）を検出した。窯体は開墾により上部を削平されていたものの、分焔柱付近で天井が残存するなど、燃焼室から分焔柱にかけての残存状況は良好であった。焼成室の壁面には、地山を掘り抜く時に付いたと考えられる工具痕が明瞭に残存し、壁に粘土を貼付することなく焼成していたことが判明した。一方、床面は残存状況が良くなく、現位置を保つ焼台は 1 点のみであった。床の下には粘土が敷き詰められ、それを取り除くと、壁と同様に工具痕が確認できた。窯内からは、窯壁とともに、窯出し時に廃棄されたと考えられる山茶碗の碗・小皿（斎藤編年第 VIII 期第 1 型式）が多数出土した。他には、調査区東部中央で東から西に流れる谷状地形（SD02）を検出した。底から近代の陶磁器が出土し、SD02 とそれに続く当初 SY01 の灰原と想定していた谷状地形は近代以降に形成されたことが判明した。ただし、ここからは SY01 から出土したものより 1 型式古い山茶碗の碗・小皿と陶器の羽釜・鍋が比較的多く出土した。猿投窯で陶器の羽釜・鍋が出土することは珍しく、搬入品とも考えられるが、灰が溶着している失敗品であることと、赤褐色をした焼台が出土していることから、周辺にこれらの製品を焼成した窯が存在した可能性が高い。（宇佐見守）

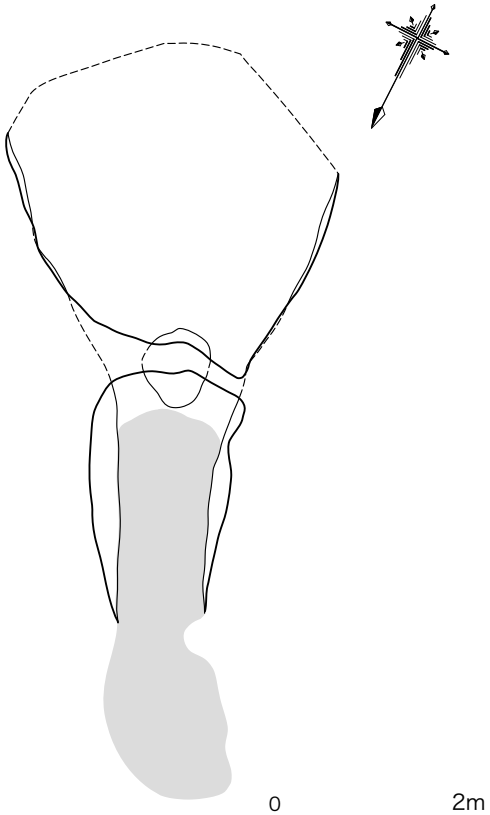

SX03


羽釜出土状況



S = 1:400

主要遺構配置図



SY01 平面図

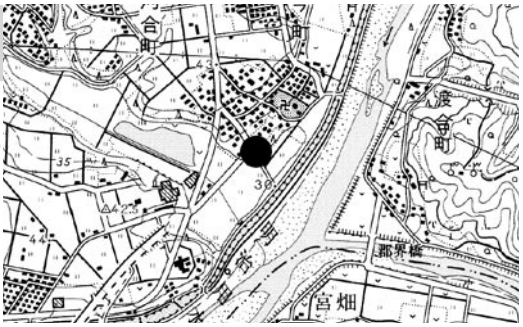
S=1/80



SY01

今町（いまちょう）遺跡

所　在　地　豊田市今町８丁目
（北緯35度02分16秒　東経137度10分11秒）
調 査 理 由　第二東海自動車道横浜名古屋線
調 査 期 間　平成18年４月～６月
調 査 面 積　2000㎡
担　当　者　宮腰健司・鈴木正貴・岡久雅浩



調査地点（1/2.5万「豊田南部」）

調査の経過　調査は中日本高速道路株式会社による第二東海自動車道の調整池建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成18年４月から６月にかけて実施した。本遺跡は平成10・12年度に第二東海自動車道の橋脚建設予定地（当時）部分の8400㎡が調査されており、今回の調査区はその未調査部分を埋めるような形で設定された。調査区の形状からＡ区～Ｃ区の３区に分けて行った。

立地と環境　今町遺跡は矢作川右岸に位置する標高約28mの碧海台地端部に立地する。調査地点の南で矢作川は巴川と大谷川が合流し、付近は加茂郡と碧海郡と額田郡の境界線に近い。

調査の概要　今回の調査では、古代から江戸時代までの遺構や遺物が確認されたが、室町時代前半以前の明瞭な遺構は確認されなかった。確認された遺構は大きく戦国時代～江戸時代中頃と江戸時代後半に大別できる。

戦国時代～江戸時代中頃　この時期は過去の調査区を合わせると大きく屋敷地が11区画確認されている。屋敷地は溝で囲まれた一辺が20m～30mの崩れた方形で、内部には掘立柱建物跡、井戸、水溜状遺構などが存在する。掘立柱建物跡は柱穴の数が非常に多いことから繰り返し建て替えられたと思われる。井戸には素掘りの井戸と石組井戸があり、屋敷の南端部では区画溝に連結した水溜状の遺構が配置された。これらの屋敷には、出土遺物からみて16世紀後半～18世紀後半に機能したと考えられる。

江戸時代後半　江戸時代後半でも屋敷割は戦国時代から江戸時代中頃の区画とあまり変化しないが、18世紀後半くらいに部分的に溝を付け替えたり整地したりした状況が確認された。ただ、19世紀の遺物が少ないことから人々は徐々に現在の今町の集落に移転したことが考えられる。

まとめ　今回確認された屋敷群は規模がそれほど大きくないため支配者層の居宅とは考えにくい。遺跡が加茂郡南端の郡境にあり３河川が合流する地点であることから、矢作川水運を利用した交易の中継点として機能した集落跡の可能性が考えられる。　（鈴木正貴）


Ｂ区遺構全体（西から）


Ｂ区の区画溝と水溜状遺構（南東から）



C 区遺構全体 (南西から)



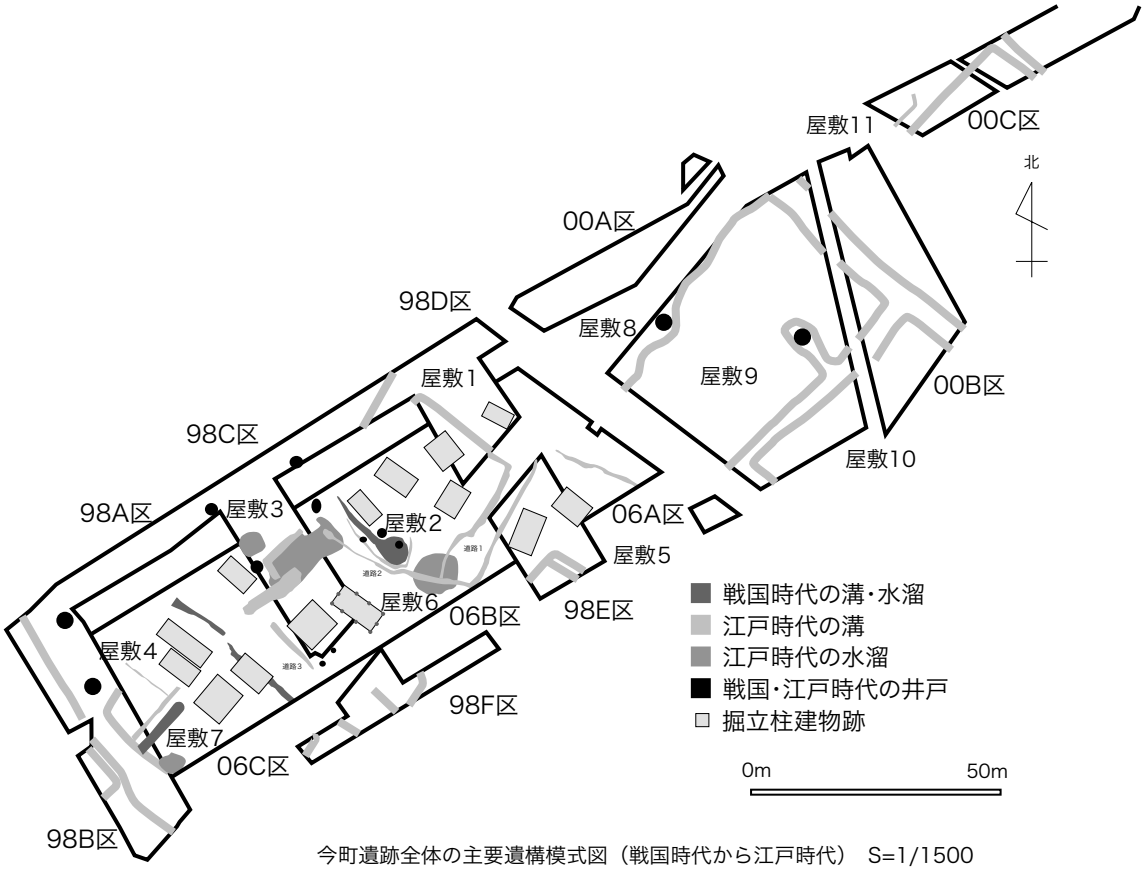
石敷火処遺構 SK1043(北東から)



戦国時代の井戸 SE03(東から)



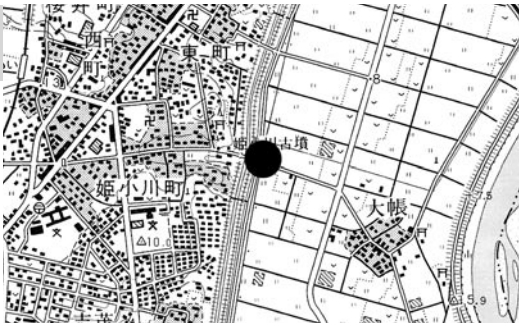
江戸時代の石組井戸 SE01(東から)



今町遺跡全体の主要遺構模式図（戦国時代から江戸時代）　S=1/1500

姫下（ひめした）遺跡

所　在　地　安城市姫小川町
（北緯 34 度 54 分 52 秒　東経 137 度 5 分 49 秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）
調 査 期 間　平成 18 年 10 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　3950 ㎡
担　当　者　宮腰健司・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　発掘調査は、愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成 17 年度（調査面積 3470 ㎡）から引き続き 2 年目の調査である。昨年度は姫下橋の両脇に調査区を設定したが、今年度はさらにそれぞれの南側と北側に調査区を設定した。すなわち 05A 区の北側に 06A・B 区、05B 区の南側に 06C 区である。

立地と環境　姫下遺跡は現鹿乗川東岸の沖積地（標高 7m）に広がる弥生時代中期から江戸時代までの複合遺跡である。遺跡西方には碧海台地縁辺がせまり、それとの高低差は約 4m である。台地縁辺には前方後円墳である姫小川古墳(全長 69m)をはじめとする古墳群がある。また東方約 250m の微高地には内行花文鏡の出土した八ツ塚古墳があった（滅失)。

調査の概要　調査の結果、06A・B 区では平安時代中・後期から鎌倉時代前半の遺構・遺物を中心に、06C 区では河川跡と古墳時代前期から中期前半を中心とする土器の集積を確認した。

06A 区　06A 区では、灰釉陶器から山茶椀が出土した。灰釉陶器は東山 72 号窯式期以降が主体である。また若干ではあるが三河型土師器甕や中世伊勢型鍋も出土した。これらの時期幅は 10 世紀後半～ 12 世紀代である。しかしながらその数量は調査面積に比べわずかである。

遺構は、古墳時代から平安時代中期までの堆積層と考えられる黒褐色シルト層の上面において検出できた。遺構は平面形が 3 ～ 5m 規模の方形で平らな底面をなすものが多数検出された。覆土は褐灰色シルトを主体とする。それ以外には同様の覆土の溝が確認できた。遺構群のうち前者についてはその形状から竪穴建物跡の可能性が高いと判断した。ただし柱穴や炉跡などの施設はなく遺物も少ない。

次に地山となる砂層上面にて検出された遺構がある。調査区北辺にて断面形状が一定でない幅 30 ～ 60cm の小溝や土坑が検出された。遺構は黒褐色シルト層に完全に覆われており、同層形成以前のものであることが考えられる。出土遺物は少ないが古墳時代前期をさかのぼるものと考えられる。ただ調査区北辺以外では顕著な遺構はなく、北に隣接する亀塚遺跡の弥生時代を中心とする遺構に関連するものと推測される。

06B 区　06B 区も 06A 区と同様に灰釉陶器主体の出土遺物があった。しかしこちらでは 9 世紀前半の須恵器の他、古墳時代前期の土師器が調査区南半部で出土した。このことから 05A・　B 区から続く古墳時代集落の北限がこの辺りになることが推測される。

遺構は 06A 区で検出されたものと同じ竪穴建物跡の他、黒褐色土層を深く掘り込まれた竪穴建物跡も確認された。後者の建物跡では周溝や柱穴が確認された事例もあり、これらは 06A 区の竪穴建物より時期がさかのぼるものと考えられるが、出土遺物は少なく時期判定が難しい。竪穴建物跡以外ではおおむね北東から南西方向に不規則な屈曲をも

つ幅約 40cm の小溝が数条確認されたが、これらは竪穴建物跡に先行する。また、地山砂層上面で検出された袋状土坑の底部からは条痕文系土器が出土しており、ここでも古墳時代前期をさかのぼる遺構が散在することが確認された。

06C 区

06C 区では、05B 区で検出された北東 - 南西方向の河川跡が、調査区の北西 1/2 程で確認された。この河川跡は昨年度の成果で得られたように、古墳時代前期から中期にかけて埋没しており、古代から中世には河川の深い部分が窪地状を呈していたようである。今年度の調査では新たに、河川の中央部に向かって緩やかに傾斜する幅約 12 mの段状の地形が確認された。この段状の地形は調査区北西隅で急激に深くなり、この深い部分において鋤・曲柄などの製品を含む多くの加工材や木材、杭列が出土している。また河川肩部分では河川北岸と同様、廻間 III 式から松河戸 I 式期の土器の多量廃棄が見られ、北端で人面文土器片が出土している。河川肩部の南端では廻間 III 式のまとまった土器が廃棄された土坑や、断面が漏斗状を呈する古墳時代前期の井戸が検出されている。

河川跡の浅い段状地形部分では竪穴建物跡が検出された。これらの建物跡は河川上部の平安時代の堆積を掘り込んで作られており、平安時代後期から鎌倉時代のものと考えられる。建物は調査区南東部の微高地部分にも存在した可能性があるが、後世に削平されているようで、該期の遺構は若干の土坑のみであった。またこれ以外にも微高地部分では江戸時代後期の溝・大型土坑が検出されている。

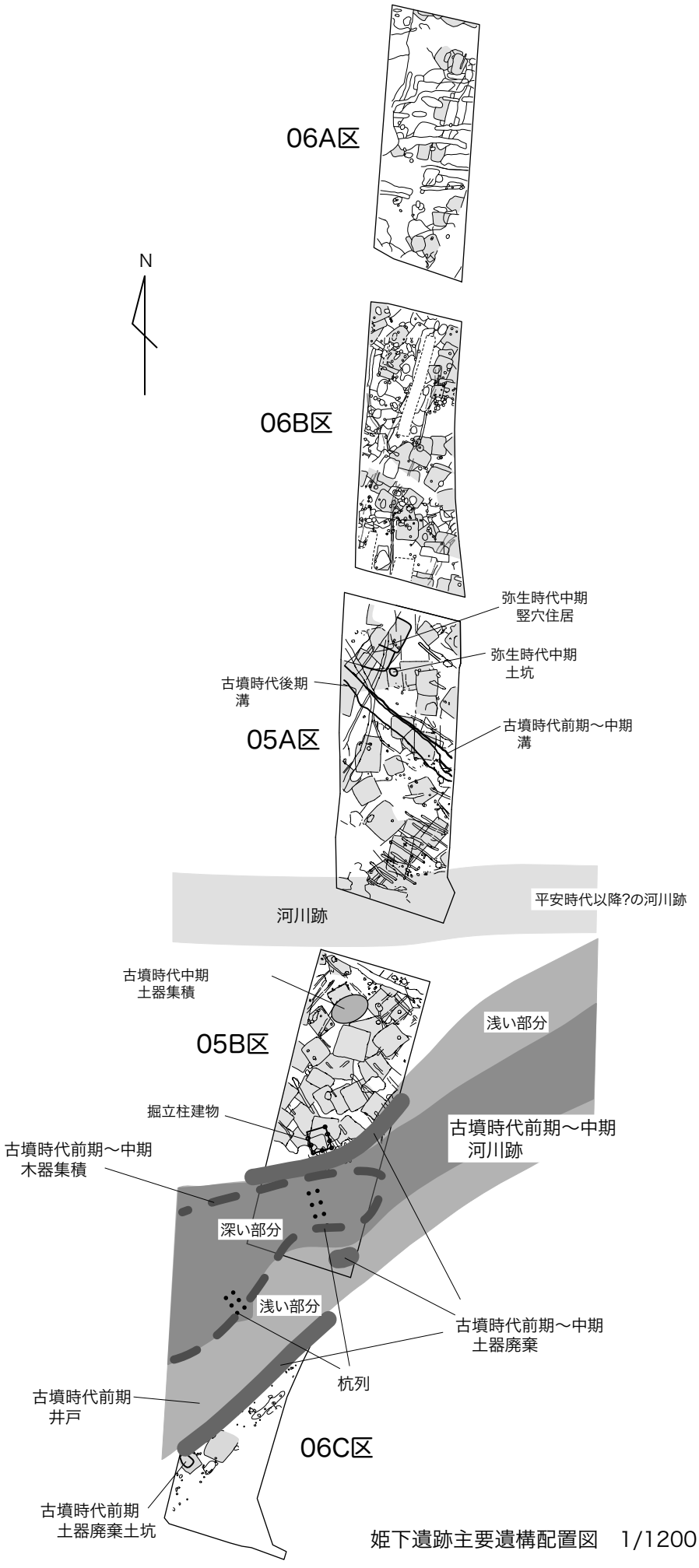
まとめ

06A・B 区で確認された平安時代の竪穴建物とみられる遺構群は、05A 区で確認された 10 世紀前半の竪穴建物跡に継続する平安時代中〜後期の集落遺構と考えられる。西三河地域では当該期の集落があまり知られておらず、建物構造も含めて今後の検討課題である。また、遺跡南部の河川跡付近では奈良時代後期から平安時代前期の須恵器・灰釉陶器もみられ、遺跡北部の出土傾向とは異なる。このことから平安時代を通じて遺跡南部から北部へと集落域が拡大したことが推測できよう。そして 13 世紀代には居住地としての土地利用がなされなくなったと考えられる。

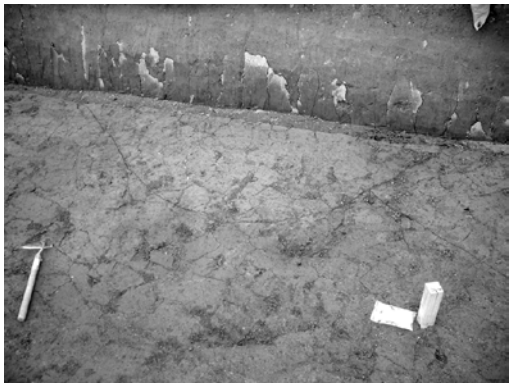
06C 区では、古墳時代前期から中期にかけての河川跡の南岸の様相が明らかになった。特に浅い段状の地形から肩部にある井戸や、祭祀を思わせる一括廃棄がなされた土坑は、この地点の土地利用の一端が窺われる事例と考えられる。また河川肩部への多量の土器廃棄は、北岸と同様廻間 III 式から松河戸 I 式にかけて継続的に行われており、南側にも該期の集落が存在することが想定された。遺物では、鹿乗川流域付近に集中する人面文土器が出土したことが特筆できる。さらに新たに平安時代後期から鎌倉時代の集落域がこの地点まで広がっていることも確認された。　　（宮腰健司・永井邦仁）



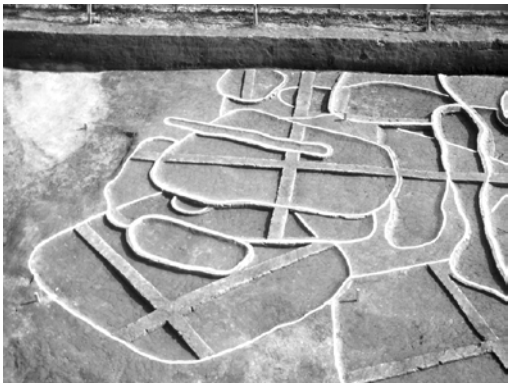
06C 区出土人面文土器



姫下遺跡主要遺構配置図　1/1200



06A 区竪穴建物跡検出状況



06A 区竪穴建物跡



06B 区竪穴建物跡調査風景



06B 区南部全景



06C 区全景



06C 区河川跡南岸土器出土状態



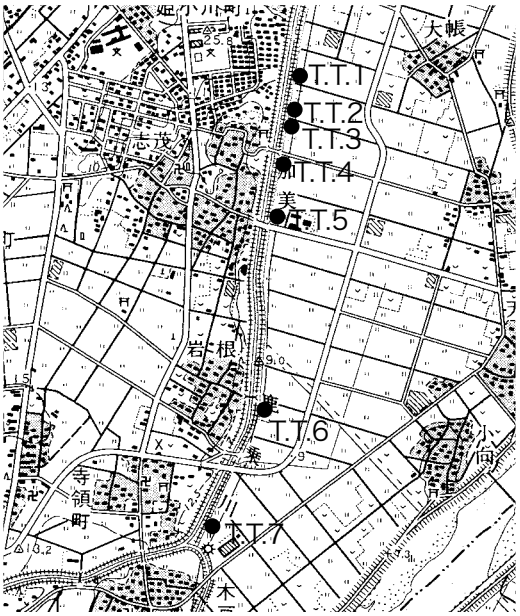
06C 区河川跡木器出土状態



06C 区土器廃棄土坑

鹿乗川流域遺跡群（かのりがわりゅういき） 範囲確認調査

所　在　地　安城市小川町寄島・上太田・向田・岩根下ほか
（北緯 34 度 54 分 42 秒　東経 137 度 05 分 46 秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）
調 査 期 間　平成 18 年 10 月
調 査 面 積　100 ㎡
担　当　者　宮腰健司



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は県建設部河川課による中小河川改良事業（鹿乗川）に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成 18 年 10 月に実施した。調査では、水田区画ごとに小川町寄島地内に２カ所、上太田地内に２カ所、向田地内に１カ所、岩根下地内に１カ所、寺領町坂口地内に１カ所の計７カ所、テストトレンチを設定した。

立地と環境　鹿乗川流域遺跡群は碧海台地縁辺に沿って流れる鹿乗川の周囲に展開する遺跡群で、平行する矢作川の自然堤防上や碧海台地縁辺部に遺跡が立地する。

調査の概要　T.T.1 では南北に２×３ｍのテストトレンチを２カ所設けた。両トレンチとも河川の堆積と思われる粘土と砂、またはその互層がみられるのみで、遺構は確認できなかった。北側の T.T.1-1 トレンチでは地表面下 1.2 ｍの青灰色シルトと灰白色砂の互層より土師質土器片が２点と木片が出土している。

T.T.2 ～４では南北に２×３ｍのテストトレンチを２カ所づつ、T.T.5 では２×６ｍのテストトレンチを１カ所設けた。その結果全てのトレンチで遺物包含層及び土坑・溝・竪穴住居と思われる遺構を確認した。遺物包含層は 10 ～ 30cm の厚さで古墳時代前半の土師器や古代の灰釉陶器、中世の山茶碗が出土している。特に T.T.2 ～４では多量の遺物がみられた。

T.T.6 ・T.T.7 ではでは 2.5 × 8 ｍのテストトレンチを１カ所設けた。その結果 T.T.6 では厚さ約 30cm の褐灰色粘土の堆積を地表面下 60cm で確認したが、遺物・遺構は見つかっていない。また褐灰色粘土を切る、斑土を埋土とする土坑が１基検出され須恵器片が１点出土している。また T.T.7 では河川堆積と思われる灰黄褐色砂・暗褐色砂・灰色砂などの互層を確認したが、遺物は出土していない。


T.T.7

（宮腰健司）

設楽ダム工事関連遺跡 範囲確認調査 笹平遺跡 川向東貝津遺跡 大名倉丸山遺跡

所　在　地　北設楽郡設楽町大字小松字笹平、大字川向字東貝津、大字大名倉字丸山
（笹平遺跡：北緯 35 度 06 分 45 秒　東経 137 度 34 分 05 秒）

調 査 理 由　設楽ダム工事

調 査 期 間　平成 18 年 5 月～ 6 月

調 査 面 積　150 ㎡

担　当　者　宮腰健司・松田訓

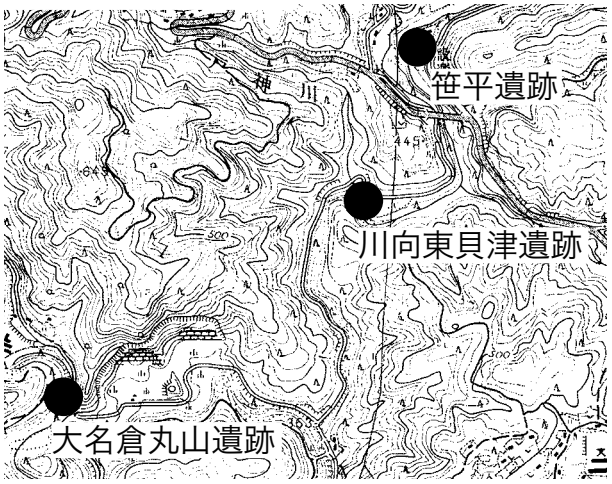
調査の経過　調査は国土交通省設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事に伴う範囲確認調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成 18 年 5 月から 6 月にかけて実施された。調査では、県教育委員会の試掘調査の結果を受け、笹平遺跡 28 ヵ所、川向東貝津遺跡 21 ヵ所、大名倉丸山遺跡 26 ヵ所のテストトレンチを設定した。

立地と環境　笹平遺跡は標高約 386 mの境川左岸、川向東貝津遺跡は標高約 378 mの境川右岸、大名倉丸山遺跡は標高約 386 mの豊川（寒狭川）左岸の河岸段丘上に立地する。

調査の概要　笹平遺跡では、縄文土器等が多数採集されている現住居地部分の南側に 28 ヵ所のテストトレンチを設けた。その結果、明確な遺物包含層は確認されなかった。ただ北部 1/3 程では平坦地と南側に向かって急激に落ち込んでいる地形が認められた。また北部トレンチでは近世以降と考えられる落ち込みが検出され、切目石錘・土師質土器片・近世陶器片が出土している。また周辺では縄文土器片を採集することができた。南部の T.T.3 では石鏃 1 点を採集している。

川向東貝津遺跡では平坦面の北部・東部を中心に 21 カ所のテストトレンチを設けた。その結果北部の斜面端に沿ってわずかに平坦地が認められたが、遺物包含層は確認されなかった。また耕作や植林による地形の改変も認められた。県教育委員会の試掘で遺物包含層を確認した南西部において縄文土器片を採集している。

大名倉丸山遺跡では平坦面の西部に 25 カ所、やや離れた東部に 1 カ所のテストトレンチを設けた。その結果明確な遺物包含層は確認されなかった。ただ西部調査地点の東側と西側で平坦面が認められ、県教育委員会の試掘で遺物包含層を確認した中央部北側では鉄滓を採集した。　（宮腰健司）

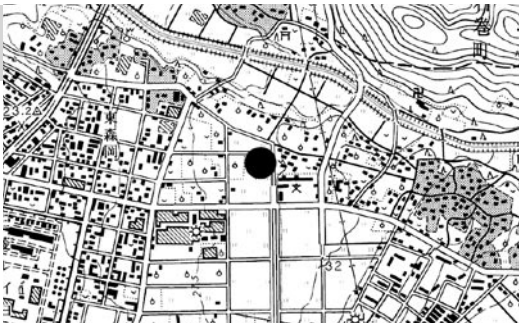


調査地点（1/2.5万「田口」）


笹平遺跡試掘調査

西浦（にしうら）遺跡

所　在　地　豊橋市石巻町
（北緯35度47分09秒　東経137度26分15秒）
調 査 理 由　道路改良工事（主）東三河環状線
調 査 期 間　平成18年7月～平成19年3月
調 査 面 積　6,700㎡
担　当　者　宮腰健司・鈴木正貴・岡久雅浩



調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　調査は愛知県建設部道路建設課による県道東三河環状線の建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成18年7月から平成19年3月にかけて実施した。全体をAa区からE区の7調査区に分けて調査を行った。

立地と環境　西浦遺跡は、石巻山の南麓に広がり、三輪川左岸の河岸段丘北端部に立地する。現地表面の標高は約30mであり、段丘下との比高は約10mある。また、調査区は南東側にある急峻な尾根から広がる扇状地の末端に位置しており、灰白色の礫層の基盤が波状に上下している。基盤が深く沈み込む箇所は網状河川のなごりと思われ、遺跡の土地利用もそうした地形と相応している。遺跡は現在の豊橋市石巻町の金田集落の西半分に相当する範囲に広がっており、今回の調査区はそのなかでも西端にあたる。周辺の台地端部には多くの遺跡が存在しており、白石遺跡や高井遺跡群など、とくに弥生時代から古代にかけての遺跡が多い。

調査の概要　今回の調査で確認された遺構は、大きく弥生時代中期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代～鎌倉時代、戦国時代～江戸時代前期、江戸時代後期～近代に区分される。

弥生時代中期～古墳時代前期　この時期の明瞭な遺構はE区に集中している。弥生時代中期については、E区南部で竪穴住居跡や土器棺墓などが確認されている。弥生時代後期～古墳時代前期については、多数の遺構が検出されている。この時期の竪穴住居跡はE区北部から中央部で重なり合って多数存在しており、地床炉跡が明瞭に残っているものがほとんどで、複数の地床炉跡を持つものもいくつか確認された。これらの竪穴住居跡からは甕や高杯などの土器片が多数出土している。これに対して南部には方形周溝墓群が存在し、周溝から弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土している。また、E区北部からは弥生時代後期の銅鐸の舌と考えられる石製品も1点出土している。

古墳時代後期　C・D・E区から竪穴住居跡などが検出された。この時期の竪穴住居跡からは6世紀後半～7世紀後半と考えられる湖西窯系の須恵器が出土することが多い。これらの竪穴住居跡のなかにはカマド跡が残存しているものも確認されており、とくにC区最南部の649SB・E区西部の2380SB・E区北東部の2745SBなどのカマド跡は残存状況が比較的良く、649SBと2745SBからはカマドで用いられたと考えられる支脚状土製品が出土している。

平安時代～鎌倉時代　遺構としては、竪穴住居跡と溝などが確認された。この時期の竪穴住居跡はBa区でも検出されていることから、この時期には居住域がやや台地内部にまで広がったと考えられる。この時期の竪穴住居跡からは、少量ではあるが10～11世紀代と考えられる灰釉陶器が出土している。E区では、時期の異なる溝がいくつか確認された。これらの溝は中央部でほぼ直角に屈曲していることから区画溝と考えられ、その内側に居住域が展

開したものと考えられる。

戦国時代～江戸時代前期及び江戸時代後期～近代

遺構としては、区画溝、用水路、水田跡、掘立柱建物跡、井戸などが確認された。最南部のＡａ区南半部には水田跡などの耕作地があり、その北側に用水路群があったと考えられる。溝の位置関係や方位などから方形の土地区画がなされていたと考えられるが、その区画は何度か変更されていると考えられる。Ａａ区より北側の区域は、溝で区画された内側に掘立柱建物の母屋などが建ち、その南側に井戸や多くの樹木などがあった屋敷地であったと考えられる。ここでも平行する溝の時期的な違いから、区画は何度か変更されたと考えられる。また、Ｄ区では基盤まで掘削している楕円形の大型土坑が検出された。この楕円形の大型土坑が何であるかは判明していないが、様々な状況から庭園の池ではないかと想像される。

まとめ

今回の調査で、西浦遺跡は、継続的ではないが各時代に集落が営まれていた複合的な集落遺跡であることが確認された。この地での土地利用は台地端部より始まり、時代が下るにつれて徐々に台地内部へと広がっていったと考えられ、土地利用の進展状況を窺うことができる。

（岡久雅浩）



Aa 区２面全体



Ab 区全体



Ba 区１・２面全体



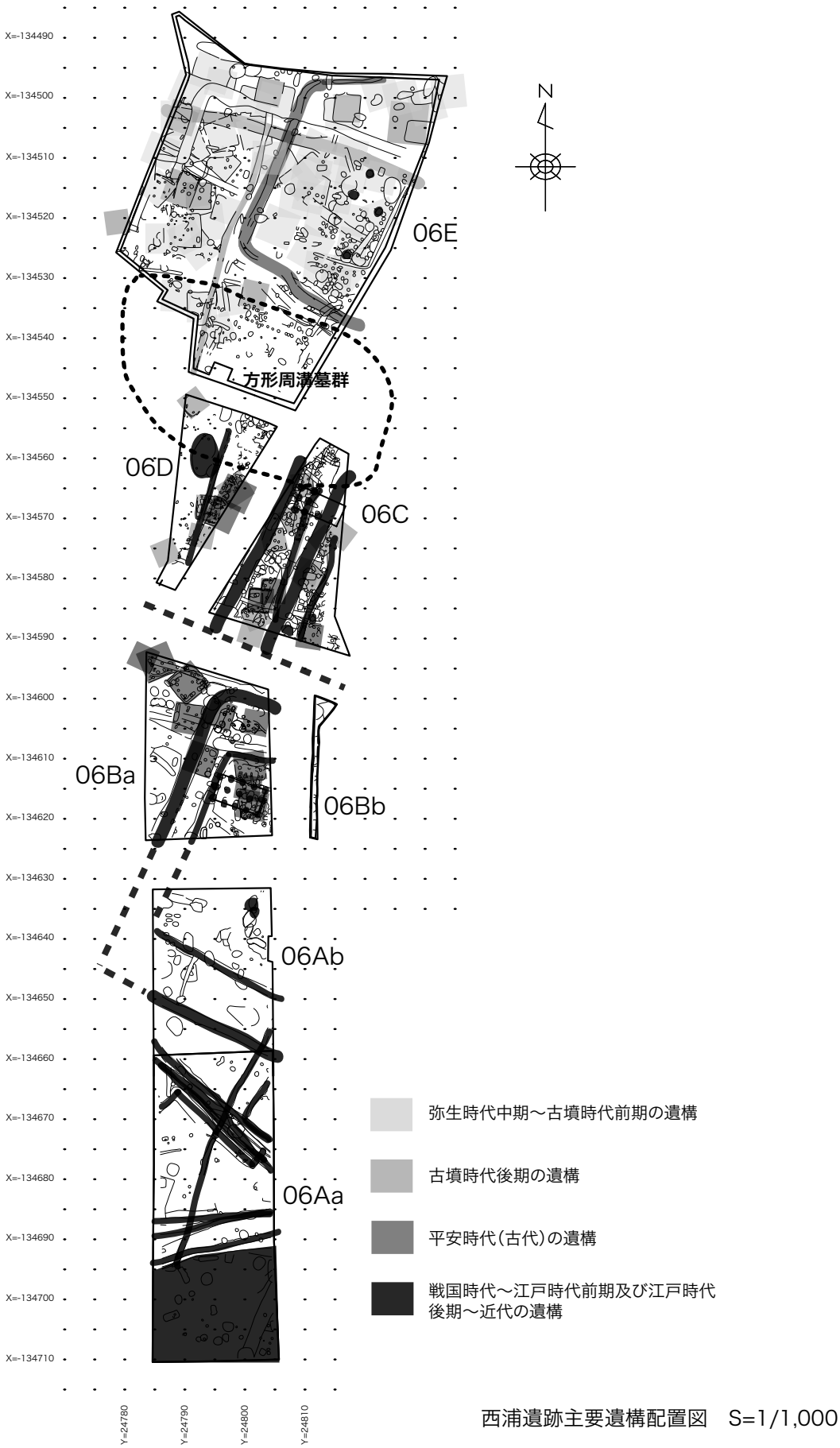
Ba 区江戸時代大溝と掘立柱建物跡



C・D 区１面全体



C 区江戸時代後期の井戸



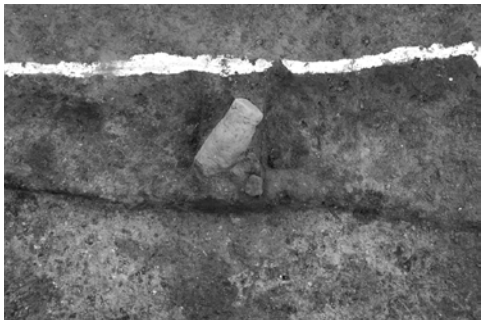
西浦遺跡主要遺構配置図　S=1/1,000



D 区江戸時代後期の楕円形大型土坑



C・D 区 2 面全体



C 区カマド跡と支脚状土製品出土状況



D 区古墳時代後期の竪穴住居跡



E 区 2 面全体



E 区弥生時代後期の竪穴住居跡



E 区 2745SB の遺物出土状況



E 区銅鐸石製舌出土状況



E 区南部方形周溝墓群



E 区土器棺墓出土状況